

第一章 アメリカ聖公会内外伝道協会と創立者ウィリアムズ

第一節 アメリカ聖公会の二潮流と創立総会

一 多難なアメリカ聖公会の草創期

アメリカがイギリスの植民地であった時代、南部諸州の英国教会に連なる教会（聖公会）は、植民地政府である体制側の宗教として権威を誇示し得る立場にあった。しかしながら、中部・南部以外の諸州では、いわゆるピューリタン系統の教会が体制宗教であった。そのため、英国教会に連なる聖公会は、それぞれ帰属する州によって微妙な立場に置かれていた。

この英国教会に連なる聖公会は、アメリカ国家の独立と歩調を合わせて、アメリカの教会として独立組織である「アメリカ・プロテスタント監督教会」(Protestant Episcopal Church in the United States of America：以下、アメリカ聖公会)を形成していった。けれども、その草創期は多難であった。まず、体制宗教として機能していた南部では、アメリカ国家の独立とともに、従来の植民地政府による聖公会への公金支出が不可能な事態に陥った。また、イギリスの植民地伝道を担ってきた英国教会系の海外福音宣教協会 (Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts：以下、SPG)から財政支援を受けていた中部・北部でも、SPGがアメリカ伝道から撤退したため、全米で財政基盤を失うことになった。こうして、アメリカにおける聖公会は教派の存亡をかけて、自発的財政にもとづく教会運営を実施する事態に追い込まれたのである。

一方、聖公会以外の全米のプロテスタント諸派にとって、独立戦争によるアメリカの勝利は、英国教会の宗教統制からの解放と、信教の自由の獲得を意味するものであった。したがって、聖公会系の教会はアメリカの独立当初から、他派による敵国宗教としての排他的感情を覚悟しなければならなかった。実際、在米プロテスタント諸派から宗教統制の象徴として嫌悪されてきた主教 (Bishop) への警戒感は相当強かった。アメリカ聖公会が体制教会から一教派に変質したとはいえ、そして、合衆国独立後も一七八四年以前にはアメリカ人主教が存在していなかったこともあり、聖公会の主教はイギリスにおけるかつての独裁専制政治を想起させる象徴的な存在であった。アメリカ聖公会は、発足当初から派内の財政危機と対外不信を抱え、険しい道のりを進まなければならなかったのである。

二 アメリカ聖公会形成途上の二潮流

アメリカ聖公会という新しい教会制度の構築をめぐることは、教会の権威を象徴する主教を重視するのか、信徒を中心とした教会の民主的運営の基盤となる総会を尊重するのか、という二つの流れがあった。それは、概して王党派と独立派の相違でもあった。主教重視派が主教制やサクラメントといった教会の客観性を重んじるハイ・チャーチ (カトリック) 系のコネティカット州を中核としたのに対し、信徒尊重派は福音主義的なロー・チャーチ (プロテスタント) 系の中部・南部を中心とした。この二潮流がアメリカ聖公会の組織形成過程で拮抗していくことになる。

アメリカ聖公会の形成に貢献したのは、総じて独立戦争中に独立派として行動した聖公会の聖職たちであった¹⁾。彼らは、州単位に散在する全米の聖公会系の教会を一教派に統合するうえで、主教を全体教会の代表として得るより先に、教区代表者によって構成される総会を開催する道を選んだ。独立派の聖職たちは、アメリカ国家の独立に教会の独立を重ねる方針をとり、主導権を握っていった。

独立派の思想も聖公会特有の主教制を否定したわけではなく、教区や総会という教会制度のなかに、主教や主教会を位置づけることで統一組織への道が模索された。それでも、この二潮流の合流に際しては、教派としての教会権威は、主教に帰せられるのではなく、総会に帰属すると内外に示すことが、新興国アメリカにおける聖公会という教派の中興にとっては必要であった。

三 アメリカ中部発進の教会組織化運動

アメリカにおける聖公会の組織化は、まずアメリカ中部を中心に進行していった。一七八二年、ペンシルヴェニアの聖職ウィリアム・ホワイト (William White) は、「アメリカ合衆国監督諸教会の考察」²⁾と題する冊子を発行し、教会の連邦組織化と信徒代表制の原則を訴えるとともに、同系諸教会の合同と再組織を提起した。この冊子のほとんどの要素は、のちのアメリカ聖公会の法憲へと継承された。

これに先立つ一七八〇年、メリーランドではウィリアム・スミス (William Smith) の主導で聖職信徒による教区会が開催され、「メリーランド・プロテスタント監督教会」を公式名称として採択した。この命名が連邦教派の正式名称であるアメリカ・プロテスタント監督教会の語源となった。

さらに、一七八三年八月のメリーランド第二回代表者会議と、翌八四年五月のペンシルヴェニア代表者会議では、外国 (イギリス) からの独立、独自の教会運営の権利、英国教会の教理・典礼・職制の護持 (必要に応じて部分改訂)、聖職信徒の代表者による法規作成などを確認した。このように、全国組織への統一運動が各教区の組織化と並行して展開されていった。

四 最初のアメリカ人主教の聖別

こうした教区の組織化を進める動きに対し、コネティカットでは、聖公会再興のために主教獲得を優先すると

いう別の歩調をとった。一七八三年三月、同州の聖職一四人のうち一〇人が秘密会合を開き、ジェレマイア・リーミング (Jeremiah Leaning) がサミュエル・シーベリー (Samuel Seabury) が、渡英して主教按手を受けてくることを票決した。これを兩名に要請したところ、リーミングは高齢のため辞退し、シーベリーがカナタベリー大主教宛のコネティカット州聖職の書簡や推薦状を持参して渡英することになった。しかし、イギリス国王に忠誠を宣誓しない者への主教聖別は議会決議できないことや、コネティカット州議会の承認がないことなどを理由に、聖別を拒否されてしまった。そこで、シーベリーはスコットランドへ向かい、一六八八年の名誉革命でウィリアム三世への忠誠を拒否したのち、スコットランドで正当な使徒継承を保持する英国教会の未公認主教 (ノン・ジューラー) たちから、一七八四年一月一日に主教としての聖別を受けた。こうして、最初のアメリカ人主教が誕生した。

このように、アメリカ聖公会の組織化では、主教按手をめぐって問題が顕在化した。アメリカ聖公会は、政治的にはイギリスから独立しながらも、教会の教理・典礼・職制に関しては、英国教会との連続性を望んだ。そのため、三聖職位 (主教・司祭・執事) の要とされる主教を得るには、三人以上の主教による按手が必要との規約を遵守しなければならず、アメリカ人聖職は英国教会の主教から按手を得る必要があったのである。

けれども、シーベリーへの対応にみられるように、英国教会側の感情は微妙であった。さらに、後述する典礼分野における祈祷書改訂問題などもあり、独立国となったアメリカの聖公会側としては、英国教会との関係改善が急務となっていた。

五 聖職信徒代表者会議と第一回準備総会

アメリカの聖公会系諸教会による連邦組織化の成否は、前述の二潮流をいかに合流させるかにかかっていた。その歩みは、一七八四年五月のプランズウィックにおける聖職信徒代表者会議から始まった。この会議では、コ

ネティカット州の聖職に聖公会復興計画への一致参加を要請することが票決された。そして、同年一〇月には第二回会議がニューヨークで開催され、これに中部諸州とメリーランドは聖職・信徒代議員を派遣し、マサチューセッツ、ロードアイランド、コネティカットの東北部からも聖職が参加、ヴァージニアからは州法の規制によりデイヴィッド・グリフィス (David Griffith) のみが参加した。第二回会議では、統一組織として聖職代議員・信徒代議員で構成される総会を開催すること、各州に創設される主教たちに総会の議席を与えることなどが確認された。

一七八五年九月二七日には第一回準備総会が開催され、ニューイングランド諸州と南部二州を除く、各州の聖職・信徒代議員が参加した。この準備総会では、ホワイトを監督に、スミスを議長に選出し、法憲草案、典礼改訂、主教獲得立案の委員会を設置した。また、アメリカの聖公会系諸教会の現状を鑑み、英国教会の諸主教や大主教に、主教制継承のための協力を要請する一方、各州の教会会議に対して、候補者からの主教選出に際しては信徒との一致を図ること、各州法に従って州当局の認可を得ることを要請した。

六 アメリカでの主教選出と英国教会の反応

これを受けて、ニューヨークはサミュエル・プロヴースト (Samuel Provost)、ペンシルヴェニアはホワイト、ヴァージニアはグリフィスを主教に選出した (メリーランドは二年前の一七八三年にスミスを選出していた)。そして、アメリカの大陸会議議長 R・H・リー (R. H. Lee) と国務大臣ジョン・ジェイ (John Jay) は、その認可証を駐英アメリカ大使ジョン・アダムス (John Adams) 経由でイギリス (国) 側に提出した。

一七八六年六月、アメリカ聖公会の準備総会はカンタベリー大主教から、アメリカへの主教継承には好意的であるものの、アメリカ側の祈祷書改訂には疑義を抱いているとの返答を受けた。このため、準備総会は法憲と祈祷書草案の写しを送付して理解を求めたが、大主教の意向は変わらず、アメリカ人への主教聖別の決議は裁可す

る一方、祈祷書草案には反対する旨があらためて表明された。

祈祷書の改訂作業は、一七八五年の準備総会から開始された。その草案は、プロテスタントの伝統を色濃く受け継いでおり、基本的に英国教会の祈祷書の使用を支持しながらも、洗礼の再生を暗示させるアタナシオ信経とニケヤ信経が削除された。さらに、使徒信経からは「黄泉に降り」という句を省き、洗礼におけるクロスのサインの省略を許可することで、保守派にとっては不快な改訂となっていたのである。結局、ニケヤ信経を復元し、使徒信経から省いていた句を戻すことにより、英国教会から理解を得られる運びとなった。

スミス、プロヴースト、ホワイト、グリフィスというアメリカ人の被選主教四人中、主教接手の推薦状を総会で得られなかったメリーランドのスミスと、教区内の妨害工作にあったヴァージニアのグリフィスは渡英することができなかった。このため、プロヴーストとホワイトの二人が一七八六年一月に渡英して、翌八七年二月四日にイギリスで主教聖別を受けた。先にスコットランドで主教聖別を受けていたシーベリーとあわせて、主教聖別に必要な三人の主教がアメリカに存在することになり、アメリカにおいても使徒継承に可能な条件がそろった。

イギリスから主教聖別を継承したのが二人のみであったことは、アメリカ聖公会にとって再分裂の火種ともなった。アメリカでイギリス系の主教が三人以上になるまでの間、スコットランド系のシーベリーと行動を共にすることを避けるように、カナタベリー大主教と含みのある約束をしたホワイトは、シーベリーにかなりの敵愾心を露呈するプロヴーストとはさまで、慎重な行動に終始せざるを得なかった。たとえば、統一運動のための三主教による会合を提案したシーベリーに対して、プロヴーストは無反応、ホワイトも当初は消極的な態度を示した。このため、コネティカットの聖職たちは、シーベリーの聖職位の有効性が認められていないことを懸念し、別に主教を選出して主教聖別を受けるよう、スコットランドに派遣することを検討するなど、再分裂の危機がくすぶっていた。

こうした事情により、イギリスで主教接手を受けた二主教が帰米してから、聖公会の二潮流が合流するまで

に、さらに二年以上を要することになったのである。

七 アメリカ聖公会創立総会の開催

一七八九年、アメリカ合衆国憲法のもとに第一回アメリカ合衆国議会が開催され、初代大統領ジョージ・ワシントン (George Washington) が選出されたことで、アメリカの政治的統一が実現した。このことは、アメリカ聖公会の教会統合への歩調に拍車をかける契機となった。同年七月二十八日、ホワイトが司牧するフィラデルフィアのキリスト教会において、アメリカ聖公会創立総会が開催されたのである。

創立総会では、プロヴーストの欠席という好機を得て、シーベリーの主教聖別の正当性を全会一致で決議した。これを受けてホワイトは、第二期創立総会初日の同年九月三〇日までにシーベリーに総会出席を懇請する一方、イギリス側の了解が得られ次第、マサチューセッツ被選主教エドワード・バース (Edward Bass) への主教聖別の共同執行を実施したい旨を伝えた。シーベリーはこの申し出を応諾し、第二期創立総会にコネティカットの代議員とともに出席した。また、これまで中部・南部と距離を置いてきたニューイングランドのマサチューセッツ、ニューハンプシャーも代議員を派遣した。

こうして、主教重視派のコネティカット側と、信徒尊重派の中部・南部との間で和解が成立する運びとなった。祈祷書もアタナシオ信経以外はほとんど復元されたことを受け、法憲に全員署名後、ホワイトとシーベリーは第一回主教会を開いた。聖職代議員会と信徒代議員会と主教会から構成される総会によって、アメリカ聖公会という全国的な統一教会組織の整備が完了したのである。

アメリカ聖公会の創立は、イギリスからの国家独立とともに、主教が教会の権威を独占する英国教会から、聖職信徒の代表者会議が運営する民主的な教会制度に変質させた。アメリカにおけるこの教派再生の歩みは、教会の権威が主教ではなく、主教や主教会を包摂する総会に帰せられたことを教会内外に示した。

それでも、教派の最高決議機関としての総会が、主教会と聖職代議員会と信徒代議員会によって構成されている構造上、主教会の承認がなければ、総会としての議決は成立しなかった。すなわち、アメリカ聖公会総会という民主的な教会制度に、主教の権威も温存されることになったともいえる。これは、アメリカ合衆国独立後のアメリカ聖公会と英国教会との国家次元の断絶、教理・職制次元の継承という交錯した関係を考慮すれば、当然の帰結でもあった。⁵⁾

第二節 アメリカ聖公会内外伝道協会の設立

一 アメリカ聖公会内外伝道協会の発足と理念の転換

アメリカ聖公会内外伝道協会 (Domestic and Foreign Missionary Society of the Protestant Episcopal Church in the USA) の設立までの歩みは、一八世紀にさかのぼる。

アメリカ聖公会の全国組織の統一が実現した三年後、一七九二年の総会は「合衆国辺境・福音宣教師支援計画」を策定した。しかし、それに対する反応は乏しく、一七九五年の総会は伝道事業を諸教区に差し戻す措置をとった。⁶⁾これは、一八世紀末から一九世紀初頭にかけての教派の停滞状況と、各教区の復興が急務という事情が影響したためである。結局、一八二一年にアメリカ聖公会内外伝道協会は正式に結成されたが、一八三五年までは教派よりも各教区の伝道事業を優先させていたというのが実態であった。

アメリカ聖公会総会の権威下に成立した内外伝道協会は、総会で選出された役員と委員が伝道任地を選定し、宣教師に委任する形で伝道活動を展開した。また、経済面では、会員と補助会の寄金に依存する自発的財政によって運営されていた。したがって、総会という教派の最高権威を代任する機構と、信徒による自発的寄金に左右される財政との両面をいかに調整するかが、伝道協会の本質的な課題であった。

そこで、一八三五年のアメリカ聖公会総会は、内外伝道協会の神学的理念を再定義するとともに、組織機構の改編を行なった。具体的にはまず、アメリカ聖公会の教会が組織されていない地域に赴いて教会を設立し、教区を形成するための伝道主教職を創設する。そして、その伝道主教基金を聖公会の全信徒に要請するという見解を前提に、アメリカ聖公会の全受洗者は全員その洗礼によって、自動的に伝道協会員となることを宣言した。これにより、全聖公会信徒は伝道協会の代行者であるという理念の構築を目指したのである。

二 国内伝道と外国伝道の対立構造

ハイ・チャーチマンが推した内外伝道協会の理念再編案は、一八三五年のアメリカ聖公会総会で可決されたが、多くのロー・チャーチの聖職信徒たちは、伝道協会の伝道意欲や伝道事業における自発性が損なわれることを懸念して反対していた。⁷⁾ それでも、ロー・チャーチ側が理念再編案を受け入れたのは、この総会で任命予定であったアメリカ国内伝道主教二人と外国伝道主教一人の合計三主教のノミネートと選出に関して、ロー側から内外一人ずつの計二主教を任命するという条件で、ハイ側との間で事前に妥協が結ばれていたからである。ところが、実際にはハイ側から国内伝道主教に二人が選出され、外国伝道主教は未選出となり、伝道主教のポストを一つも得られなかったロー側は、ハイ側に裏切られる結果となった。これをきっかけに、アメリカ国内伝道はハイ・チャーチ、外国伝道はロー・チャーチという厳然とした対立構造が生まれたのである。

一八四〇年以降、オックスフォード運動に触発されたハイ・チャーチ側と、それに厳しく対立するロー・チャーチ側の派内敵対関係がいつそう強まった。そして、国内委員会と外国委員会間の相互不和や軋轢は、アメリカ聖公会内外伝道協会傘下の伝道局年会での和解工作、三年ごとのアメリカ聖公会総会における相互の財政の査証を必要とするほどまでに深刻化した。⁸⁾

また、一九世紀半ばごろ、中国、アフリカ、日本への海外伝道主教としてアメリカ聖公会から派遣されたの

は、いずれもロー・チャーチ系のヴァージニア神学校出身の宣教師であった。アメリカ聖公会の海外伝道は、福音主義的なロー側が占めることになったのである。

このような対立構造は、アメリカ聖公会の伝道事業が制度上、国内外の両委員会に分化して展開された一八三五年から一八八五年まで半世紀にわたり継続した。このことは、ロー・チャーチ側の外国伝道に財政的に悪影響をもたらした。ハイ・チャーチ側が独占するアメリカ国内伝道に資金が集積し、ロー側が独占する外国伝道への資金が枯渇していったからである。

三 内外伝道協会の理念の転換と自発的財政の矛盾

一八三五年のアメリカ聖公会総会では、理念的に全信徒を伝道協会員と位置づけたが、全信徒に伝道協会への拠出金を教会法的に義務づけることは不可能であった。そのため、伝道協会の自発的財政という内実は維持される一方、伝道協会の財政難が解消されるには至らなかった。

アメリカ聖公会内外伝道協会は、同派の公的機関として伝道活動の必要経費を調達する責任を持つ一方、法的にはアメリカ聖公会総会の決議に拘束されていた。したがって、財政難を理由に伝道主教区の増殖を抑制するよう、総会に強いることはできなかった。このように、財政難が解消されないまま、伝道任地が増加していくという葛藤を抱える伝道協会は、既存の任地の伝道主教が懇請する追加宣教師の派遣や経済支援の要請を、不本意ながらも放置せざるを得ない状況のもとに置かれていたのである。

内外伝道協会の財政難は、国内委員会と外国委員会を統合した一八八五年以降、信徒の自発的寄金（基本的な集金は各個教会単位）だけでなく、富裕信徒による遺贈の積極活用が奏功したことで、次第に解消されていった。立教の創立者ウィリアムズ（Channing Moore Williams）が海外派遣宣教師として最初に中国へ向けて渡航した一八五五年は、まさに内外伝道協会が海外伝道における財政難に苦しんでいた時期であった。そして、財政

難はさらにその後三〇年間も続いたのである。

四 内外伝道協会の機構再編

発足当時（一八二一年）の内外伝道協会の機構をみると、国内委員会と外国委員会や理事会などをその傘下に収める一方、自らは総会の下部に置かれるという二部制であった。一八三五年には三年に一度開催される総会間の伝道事業を監督するため、新たに伝道局（Board of Missions）を設置し、同局の構成員三〇人を選出した。伝道局は、年会の開催と年報の総会への提出義務を担った。また、毎週あるいは隔週開催の実働機関である国内委員会と外国委員会を再組織し、内外伝道を別途に委託する形に機構を改めた。その結果、アメリカ聖公会内外伝道協会は、総会、伝道局、国内・外国委員会という三部制に改組された。さらに、人事面からも教会と伝道の連携の密接化が図られ、アメリカ聖公会総裁主教を伝道局長、諸主教を職務上の役員とし、諸主教は理事会と伝道局の両機関の委員となった。

一八七七年になると、国内・外国委員会と伝道局の中間で懸案を処理する暫定実務機関として、三か月ごとに開かれる理事会（Board of Managers）が新たに設置された。この理事会は、一八八五年に毎月開催となり、国内委員会と外国委員会を統合して、国内伝道機関と海外伝道機関の敵対関係を解消した。こうした組織の一元化により、アメリカ聖公会は伝道体制をより強固なものにしたのである。

その後、一九〇四年に理事会は伝道局（Board of Missions）と改名し、一九一九年に全国伝道協議会（National Council）当初は Presiding Bishop and Council（総裁主教と協議会）が新たに設置されるまで、伝道協会の基本的・実務的な執行機関としての責務を担った。そして、伝道局は翌一九二〇年一月に全国協議会の傘下に入った。この機構再編には、アメリカ聖公会が国内・海外伝道に対して、より直接的に関与することを教派内外に示す意図があった。⁹⁾

第三節 ヴァージニア教区の復興

一 アメリカ聖公会復興期の新指導者と初代ヴァージニア教区主教時代

アメリカ聖公会が連邦組織として統一された一七八九年から一八一〇年ごろまでは、派内分裂の危機収束を図るとともに、対外的にも主教への猜疑心を解いて信頼を得るため、主教は権威の主張を自粛することが賢明とされ、通常の主教任務も制限された。これにともない、一七九〇年に四人であった主教は、一八一〇年になってもいまだ六人にすぎず、主教の聖別も停滞していった。こうした主教行政の抑制期間を経ることで、アメリカ聖公会は教派中興のシンボルとしての主教のイメージを個人的な指導者像へと変貌させ、主教の権威を再構築することを目指した。

主教の指導力は、まず各教区において発揮されていった。一八一一年以降に登場した著名な主教としては、以下の四人があげられる。

・ 一八一一年にコネティカット以北のニューイングランド諸州が連合したイースタン教区主教に着任したアレキサンダー・V・グリズヴォルト (Alexander Viets Griswold)

・ 一八二一年にニューヨーク教区補佐主教となったジョン・ヘンリー・ホバート (John Henry Hobart)

・ 一八一八年に新興オハイオ教区の主教に選出されたフィランダー・チェイス (Philaender Chase)

・ 一八一四年にヴァージニア教区主教に着任したりチャード・チャニング・ムーア (Richard Channing Moore)

彼らは、各教区の復興に貢献しただけにとどまらず、アメリカ聖公会の蘇生にも寄与した新指導者として、アメリカ聖公会史に特筆されている。

アメリカ独立戦争終結から約三年後の一七八六年五月二四日、ヴァージニア州議会は信教の自由制定法を可決

した。これにより同州の聖公会諸教会は、もはやアメリカにおける英国教会という体制側の教会ではなく、州当局との公式関係から離れた一教派となったのである。

さらに、一週間後の五月三十一日に開かれたヴァージニア教区会では、デイヴィッド・グリフィスを被選主教とした。だが、教区会議長ジェームズ・マディソン (James Madison) の妨害工作を受け、ヴァージニア教区会による主教聖別のための渡英請願署名や渡航費募金は実現しなかった。その結果、グリフィスは一七八九年の教区会で主教就任を辞退し、同年七月には他界してしまった。

グリフィスに代わって、翌一七九〇年五月七日のヴァージニア教区会で被選主教となったのはマディソンであった。彼は、同年九月にヴァージニア教区主教に着任した。ヴァージニアでは、入植以来一八四年目にしてようやく主教を得たのである。

けれども、一八二二年に生涯を閉じるマディソンの二二年余りの主教在任期間は、「理性の時代」という言葉に象徴される、啓蒙思想や合理主義が蔓延した時代であり、アメリカでは広範囲に教会離れの現象がみられた時期であった。こうした状況から、マディソンは任期後半になると主教としての任務を半ば断念し、一八〇五年から一八二二年までの七年間、一度も教区会を開かなかつた。そのため、ヴァージニア教区の荒廃は著しく、一八一一年にニューヘヴンで開催されたアメリカ聖公会総会では、聖職信徒代議員会の教会情勢委員会が「ヴァージニアの教会は全滅の危機にある」と警鐘を鳴らすほどであった。¹⁰⁾

二 二代教区主教リチャード・チャニング・ムーア

一八一二年五月、ヴァージニア教区会は臨時教区会を開催し、ジョン・ブラッケン (John Bracken) を被選主教とした。¹¹⁾ だが、教区常置委員会から主教聖別推薦の証明書への署名を拒否され、ブラッケンは主教に着任できなかった。教区外からの主教選出に動いていた常置委員は、ニューヨーク教区聖ステファン教会牧師のリチャー

ド・チャニング・ムーアと交渉していたのである¹²⁾。

この件に関し、ニューヨーク教区主教ホバートとフィラデルフィア教区主教ホワイトに相談したチャニング・ムーアは、ヴァージニア教区からの公式の招待と選出が整えばとの条件で受諾した。そして、リチャード・チャニング・ムーアは、一八一四年五月四日のヴァージニア臨時教区会でヴァージニア教区主教に選出され、同月のアメリカ聖公会総会における主教聖別を経て、第二代ヴァージニア教区主教に着任した。立教創立者ウィリアムズの名前であるチャニング・ムーアは、この第二代教区主教の苗字から取られたものである。

ところで、一七八五年に第一回ヴァージニア教区会はある規則を採択していた。それは、主教は巡回訪問をできないこと（第八条）、主教の管理体制に制限を加えること（第一条）など、主教への不信任を教区規定に反映したものであった¹³⁾。この点については、初代主教マデイスンの時代になっても改善されていなかった。とくに主教の巡回訪問に対する拒絶は強く、規則採択から二九年後のチャニング・ムーアの主教着任時も、依然として歓迎されていなかったのである。

リチャード・チャニング・ムーアは、ヴァージニア教区主教に着任早々、主教の巡回訪問を敢行した。彼が最初の主教訪問でみせた自身の模範と指導力によって、青年聖職たちは彼ら自身の教会の範囲を越えて、無牧の地域に出かけて奉仕するようになった。また、年配聖職たちも情熱を新たに信徒への献身に励み、多数の聖職候補生を輩出することにつながった。

チャニング・ムーアが着任した一八一四年以降、一八二三年にヴァージニア神学校が正式に発足するまでの間も、すでに何人かは聖職按手を受けていた。そのなかからは、ノースカロライナ教区初代主教ジョン・S・レイヴェンスクロフト（John Stark Ravenscroft）、ルイジアナ教区初代主教レオニダス・ポーク（Leonidas Polk）、ケンタッキー教区初代主教ベンジャミン・B・スミス（Benjamin Bosworth Smith）、アラバマ教区初代主教ニコラス・H・コブス（Nicholas Hammer Cobbs）など、将来初代教区主教となる一群が輩出された。一八三三年

のヴァージニア教区会における五六人の聖職中四四人は、第二代教区主教リチャード・チャニング・ムーアが按手した人たちであった。

また、それまでヴァージニアでは、州都リッチモンドで教区会が定期開催されていたが、チャニング・ムーアは州内各地を巡回して開くように改めた。これにより、主教不在でも遠隔地の聖職による相互啓発や聖職連盟の再組織化が可能となった。このような聖職たちの活性化は、財政難の教会に所属する信徒の自発的寄金にも運動していった。

一八二九年は立教創立者ウィリアムズが誕生した年である。同年にヴァージニア教区では、聖職未亡人・孤児救済委員会が設置され、ヴァージニア州内の伝道回復を目的とした教区伝道協会も設立された。ウィリアムズが四歳のときに他界した父ジョン・グリーン (John Green) は、ヴァージニア教区伝道協会初代主事 (一八三〇～三二年は実行委員会主事) である。ジョンは、教区主教チャニング・ムーアが管理するモニユメンタル教会の信徒として、日曜学校の副校長や監督を務めていただけでなく、ヴァージニア教区でも代議員、主事、信徒代議員の資格証明調査委員、教会情勢委員、アメリカ聖公会総会代議員などの要職を兼務していた。一八三四年五月二一日のヴァージニア教区会は、ジョンの死に弔意の決議を行なっている。⁽¹⁴⁾

さらに、教区主教チャニング・ムーアは、祈祷書・文書協会の設立に着手し、一八一六年から超教派団体のヴァージニア聖書協会会長に就任するなど、教区外の活動にも意欲的に従事した。その結果、チャニング・ムーアの教区主教着任当時、七聖職・一三教会という小規模教区であったヴァージニア教区は、二七年後の彼の世界時になると、八九聖職・九四教会という大教区へと成長を遂げた。荒廃したヴァージニア教区の復興は、彼の指導力がなければ実現しなかったのである。

ヴァージニア教区第二代主教リチャード・チャニング・ムーアによって教区の復興が進むなか、こうした状況と教区会による厳しい倫理規定をいかに調和させるかが課題となった。一八一八年のヴァージニア教区会では、

次のような流行娯楽に関する決議を満場一致で採択していた。

当教会の全受聖賢者は、賭博、劇場鑑賞、舞踏会、競馬を断つべきである。それは天の父の加護への懇願に對立する誘惑へと自発的に駆け込むことにより、キリスト者の性質である純粹性を汚し、敬虔な兄弟を侮辱し、彼ら自身の救いを危険にする悪影響を持つているからである。¹⁵⁾

一見、この決議は厳格な倫理規定との印象を受けるが、実は一八一六年のヴァージニア教区会に提出されていた法憲法規改正案の厳格な内容を、穩健な表現による定義へと緩和させたものであった。具体的には、一八一六年の教区会で最後の討議まで延期された四法規のなかでも、とくに「信徒規則」という第六条・第七条の新しい条項が問題となった。

第六条は、泥酔、淫乱、冒瀆、罵倒、全般的な礼拝怠慢、安息日破り、典札中の不遜な行為、賭博、強奪、その他明白な生活上の悪徳は、不品行、犯罪として咎められ、公式に非難を受け、聖餐を拒絶されるという「ふさわしくないキリスト教徒」を詳細に定めたものであった。結局、この第六条は第七条とともに撤廃されたが、「礼拝怠慢」や「安息日破り」さえ咎められる厳格な倫理規定を緩和したものが、一八一八年の教区会における流行娯楽に関する決議文であった。その採択にはチャニング・ムーアの間接的な関与が推察されている。¹⁶⁾

三 第三代教区主教ウィリアム・ミード

ヴァージニア教区を劇的に再生したりチャード・チャニング・ムーアの後継者は、ウィリアム・ミード(William Meade)である。ミードは、一八二八年に教区会で補佐主教として選出され、一八四一年にチャニング・ムーアが他界したのち、第三代ヴァージニア教区主教となった。青年執事時代にはムーアをニューヨークから教区主教として迎えるために奔走するなど、早い時期から教区再建に関与していた。先任や後任の教区主教からはヴァージニア神学校設立の功労者として評価を受けており、この神学校では自ら最上級生の牧会神学の教授

を長年務めた。

ミードは、聖書協会、祈祷書・トラクト協会、伝道協会などの博愛的組織を支援するとともに、超教区的活動にも力を注ぎ、一八二六年にアメリカ聖公会総会の権威下に入らない、自発性を原則とする聖公会日曜学校連盟を組織した。また、一八四七年には福音主義的知識協会を組織し、アメリカ植民地協会にも早期から関与していた。これらのうち福音主義的知識協会は、イギリス発信のオックスフォード運動がアメリカ聖公会のハイ・チャーチマン（カトリック系）に影響を与えていた当時、これに対抗するため、ロー・チャーチマン（プロテスタント系）の党派的急先鋒として、ミードが積極的にその設立にかかわったものであった。

教派内外・教区内外の活動を精力的に展開したミードであったが、ヴァージニア教区の規律に関しては、前任主教のリチャード・チャニング・ムーア以上に厳しい姿勢で臨んだ。ミードは、競馬、トランプ賭博、劇場などの流行娯楽に反対する立場をとり、一八四七年にはヴァージニア教区信徒に対し牧会書簡を出した。この書簡は、服装、食物、世俗的娯楽に関して警鐘を鳴らし、詩篇や聖歌といった霊歌や聖書の勧めを説くなど、信徒の私生活に干渉する方針を示したものであった。¹⁹

そして、翌一八四八年には教会受聖餐者としてキリスト教徒にふさわしくない習慣を詳細に規定した、次のような聖職に関する法規を教区会において満場一致で可決した。これは、一八四九年の教区会でいったん批准を見送られたものの、一八五〇年に批准された。

受聖餐者としての教会員で、キリスト教徒にふさわしくない習慣的行為をする者はだれでも、典礼執行規定にしたがって、教会牧師により主の食卓（聖餐式）から拒絶され、警告される。賭博、競馬、劇場の娯楽、淫らで放縱な展示や興行。舞踏会、礼拝の習慣的怠惰、教会が裁可した標準として一般的に定められた福音教理の拒否などは、規則が行使されるべき違反である。

しかも、「これは教会における規則の問題すべてを包含するものと解釈されるべきではない」と宣言すること

で、そこに言及されていないものも対象となった。また、聖職違反者には職制のはく奪という厳しい問責も課せられた。⁽²⁰⁾これは、当時よりも世俗的な社会現象が懸念されていた三〇年以上前に、内容が厳粛過ぎるとの判断から可決されなかった前述の一八一六年の「信徒規則」の内容に匹敵するか、それをも上回る厳格な倫理規定であった。ウィリアム・ミードが第三代教区主教であった時期は、ヴァージニア教区の聖職信徒は、規律的に厳しく拘束される状態にあったのである。

四 第四代教区主教ジョン・ジョーンズ

ミードが第三代教区主教に就任した翌年の一八四二年、ジョン・ジョーンズ (John Johns) が教区補佐主教に選出された。彼は、一八六一年のミード他界後、第四代ヴァージニア教区主教となり、以後一八七六年まで計三五年間、主教としてヴァージニアに在住した。

アメリカ聖公会内のオックスフォード運動をめぐる論争は、ジョーンズがヴァージニア教区補佐主教に選出されたころ、まさに頂点に達しようとしていた。ジョーンズは、ミードほど党派的ロー・チャーチマンではなかったが、福音主義の立場からオックスフォード文書のハイ・チャーチ的な教理的性質を拒絶し、一八四〇年代に聖公会がハイ・チャーチ色に侵食されかけたとき、福音主義的信念を貫いた。

他方、往時ケンタッキー教区補佐主教であったヴァージニア出身の G・D・カミングズ (George David Cummins) は、一八七三〜七五年の第二期ハイ・チャーチ攻勢に反抗して、福音主義的立場からアメリカ聖公会離脱の方針と、その標準を掲げながら改革聖公会を結成した。このとき、ジョーンズが動くことはなかったが、ヴァージニア教区の聖職信徒の大部分はジョーンズに全幅の信頼を寄せ、彼の決意次第では聖公会を脱退するともいわれていた。ヴァージニアでの聖公会離脱運動は、ロー・チャーチの過激分子に先導されたもので、同世代のアメリカ聖公会の指導者たちからは聖公会の危機として憂慮されたが、ジョーンズによって食い止められ

たのである。⁽²¹⁾

ジョーンズは、ウィリアム・アンド・メアリー大学の学長就任を要請され、一度は謝絶していたものの、一八四九年に着任した。立教創立者ウィリアムズが同大学に入学する前年のことである。⁽²²⁾ジョーンズが学長に囑望されたのは、奴隷制問題に関する論争において理論的で中立的な立場をとってきたため、大学の政治的危機を最小の摩擦によって修復できる最適の人材として認められたからである。諸大学が林立していた当時、経済面で困難に直面する大学も多いなか、ジョーンズは学長として手腕を発揮し、ウィリアムズ・アンド・メアリー大学の財政危機を救った。⁽²³⁾

そして、アメリカ合衆国が南北戦争に突入した一八六〇年代前半、アメリカのキリスト教諸派が南北に分裂したように、地域支持を基盤としていたアメリカ聖公会も一時的に二分された。しかし、ジョーンズは戦後、被災した南部最大のヴァージニア教区を復興させるとともに、ヴァージニア教区をアメリカ聖公会に復帰させたのであった。

五 立教創立者ウィリアムズの宣教師任命と聖職接手

一八五五年六月二八日、ヴァージニア神学校の卒業式が行なわれ、ウィリアムズはヴァージニア教区主教ウィリアム・ミードから卒業証書を授与された。そして、その翌日の六月二九日にはアレクサンドリアの聖パウロ教会で、ミードによって執事に按手された。⁽²⁴⁾

ウィリアムズは、卒業間近の一八五五年四月四日の書簡で、中国伝道宣教師を志願する意思をアメリカ聖公会内外伝道協会外国委員会に表明していた。そのなかで、外国委員会がウィリアムズを中国に派遣する日時を決めるまで、ヴァージニア教区主教ウィリアム・ミードがヴァージニアのある教会を彼に与えると通知してきたことに言及し、これについて「かなり失望している」ことを伝えるとともに、早秋の中国派遣を外国委員会が明言す

ることを求めた。⁽²⁵⁾さらに、神学校卒業後の一八五五年七月二〇日の書簡でも、ウィリアムズは遣清宣教師任命を求めたが、財政難の外国委員会はすぐには応諾できない状況下にあった。ウィリアムズがヴァージニアでの教会任務を望まなかったのは、一八五五年早秋の中国派遣の可能性があるなら、教会赴任に同意してもわずか二、三か月であり、そのような短期間の教会任務は有効でないばかりか、教会任務のために出航の機会を逸する可能性さえあると考えたからである。

そこで、ウィリアムズは一八五五年八月一日の書簡で、外国委員会が同年一月一日までに中国渡航の許可を与える可能性がかなり大きいと思われるため、またミッド主教が斡旋している教会委員会も短期間の雇用には意欲的でないと思われるため、教会任務の話を辞退したことを外国委員会に伝えた。⁽²⁷⁾このように、遣清宣教師として東洋に渡航する直前、青年執事のウィリアムズは、中国伝道への使命感と、帰属教区主教ウィリアム・ミードによるヴァージニア教区内の教会任務の要請という圧力のはさまで悩まされていたのである。外国委員会がウィリアムズを遣清宣教師に任命することを決議したのは、一八五五年一〇月二三日であった。⁽²⁸⁾

その一〇年後、アメリカ南北戦争終結後の一八六五年一〇月二三日、アメリカ聖公会総会は遣日宣教師チャニング・ムーア・ウィリアムズを第二代中国・日本伝道主教に選出した。前年七月に他界した初代中国・日本伝道主教ウィリアム・ジョーンズ・ブーン⁽²⁹⁾の後継者に選ばれたのである。⁽³⁰⁾そして、翌一八六六年一〇月三日、ウィリアムズはニューヨーク市聖ヨハネ礼拝堂で主教に按手された。このとき説教を行なったのが、かつてウィリアムズの大学生時代に学長を務めた第四代ヴァージニア教区主教ジョン・ジョーンズであった。アメリカ聖公会伝道機関誌『スピリット・オブ・ミッシェンズ』一八六六年一月号は、ジョン・ジョーンズによる主教按手の説教について次のように報じている。

ジョーンズは、マルコによる福音書第一六章一五節の「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい」という句を引用し、大学時代から熟知しているウィリアムズについて語るとともに、彼が

この職務に対して、秀逸な適合性を持っていることを感動的に訴えた。そして、もし当人がその場になければ、ジョーンズはさらにウィリアムズを賞賛したのであろう。⁽³¹⁾

第四節 来日前のウィリアムズ

一 謙遜な宣教師

一八九四年一二月刊の雑誌『太陽』（第一巻第七号）は、政治家、軍人、文豪などの偉人特集号であった。そのなかに、近代日本の代表的な宣教師として、G・H・F・フルベッキ（Guido Hernan Fridolin Verbeck）、J・C・ヘボン（James Curtis Hepburn）、C・M・ウィリアムズ（Channing Moore Williams）の三人が写真入りで紹介された。

『ミカドズ・エンパイア』の著者W・E・グリフィス（William Elliot Griffiths）は、フルベッキ、ヘボン、S・R・ブラウン（Samuel Robbins Brown）、ウィリアムズの四人の宣教師こそ、アメリカが日本に贈った最高のプレゼントであると評し、ウィリアムズを除く三人の伝記を著した。ウィリアムズの伝記だけが実現しなかったのは、ウィリアムズがそれを許可しなかったからである。

幕末の一八五九年に最初のプロテスタント宣教師の一人として来日し、アメリカ聖公会初代日本伝道専任主教、立教創立者、日本聖公会の開祖であったウィリアムズは、遺言書で自らの書簡や説教メモなどの出版を厳禁した。そして、最後の離日に際して、それらの資料をほとんど焼却させるほど、自身の事績が明らかになることを拒んだ。ウィリアムズの知名度が低いのは、彼自身がそう望んだことによるものであった。

二 家系

ウィリアムズの先祖は、ロンドンで現在の王室弁護士にあたるイギリス最高位法廷弁護士（一六八〇年廃止）であったピエール・ウィリアムズ (Pierre Williams) まで遡る。ジョン (John Williams) 、ウィリアム (William Williams) 、オットー (Otho Williams) とは、ピエールの孫の代になって、ウィリアムズ家は北米植民地に移住した。それぞれの入植地は、ジョンがサウスカロライナ、ウィリアムがヴァージニア、オットーがメリーランドであった。⁽³²⁾ 北米ニューイングランドに入植したピューリタンとは対照的に、彼らがイギリス植民地の南部に移住したことは、祖父の王室関係の職業とあわせ、ウィリアムズ家が体制側の移民であったことを示している。

ヴァージニアに入植したウィリアムには、子どもに恵まれず亡くなったジョン (John Williams) と、カルペパーの裁判所付近に広大な土地を保有したウィリアム (William Williams) という二人の息子がいた。⁽³³⁾ 後者の職業はその保有地の場所から推測して曾祖父ピエールと同じ法廷弁護士だったようで、カルペパー村はヴァージニアを南北に縦断するブルーリッジ山脈北部の麓にあった。同地の聖マルコ教会は、当初辺境地スポットシルヴェニアの聖ジョージ教会の一部であったが、一七三〇年五月にヴァージニア州議会が制定した聖マルコ教会独立法令により、その後分離独立した。⁽³⁴⁾ カルペパーのウィリアム・ウィリアムズは、一七四六年から二〇年間聖マルコ教会の教会委員を務めたフィリップ・クレイトン (Philip Clayton) の娘と結婚し、ウィリアム自身も一七六一年に教会委員となった。亡くなったのは、一七七八年である。⁽³⁵⁾

このウィリアムには、ジョン、(John Williams) 、ジェームズ (James Williams) 、フィリップ (Philip Williams) 、ウィリアム・クレイトン (William Clayton Williams) 、メアリー (Mary Williams) の五人の子どもがいた。このうち第四子のウィリアム・クレイトンは、ヴァージニア州都リッチモンドに移住し、長年法曹界の指導的弁護士として活躍した。⁽³⁶⁾ 彼はアリス・バーウエル (Alice Burwell) と結婚し、ジョン・グリーン (John Green Williams) 、ルイス・B (Lewis B. Williams) 、ルーシー (Lucy Williams) の三子をもうけたが、長男のジョンが

C・M・ウィリアムズの父である。ジョンはリッチモンドの著名な弁護士となり、ルイスもオレンジ郡の官選弁護士となるなど、ウィリアムズ一家は代々弁護士の道歩んだ。³⁷⁾

ジョン・グリーン・ウィリアムズは、リッチモンドの医師ジョン (John Cringan) とアン (Ann Cringan) のクリンガン夫妻の娘メアリー・アン・クリンガン (Mary Ann Cringan) と結婚し、四男・二女をもうけた。長男ウィリアム・クレイトン (William Clayton Williams) 次男ジョン・グリーン (John Green Williams) 長女メアリー・オズルゾー (Mary Oglvie Williams) 次女アリス (Alice Williams) 三男チャニング・ムーア (Channing Moore Williams) 四男ロバート・F (Robert F. Williams) である。この第五子三男が立教創立者のC・M・ウィリアムズである。³⁸⁾

このように、ウィリアムズ家が先祖代々聖公会信徒で、その多くが弁護士の職に携わっていたことは、C・M・ウィリアムズに揺るぎない教派性と法的思考力の資質を養わせる背景となった。

三 家族・生い立ち

父のジョン・グリーン・ウィリアムズ (一七九六―一八三三年) は、三七年の短い生涯を弁護士で終えた。一八一四年にリッチモンド劇場の大火災跡地に、第二代ヴァージニア教区主教リチャード・チャニング・ムーアを牧師として擁するモニメンタル教会が建てられると、当時一八歳のジョン・グリーンは同教会の信徒となった。³⁹⁾ ウィリアムズ一家は全員この教会の信徒であり、C・M・ウィリアムズが誕生した一八二九年の教会員数は一七〇人であった。⁴⁰⁾ このモニメンタル教会で幼児洗礼を受けたC・M・ウィリアムズは、教会主任牧師である第二代教区主教リチャード・チャニング・ムーアから、チャニング・ムーアの名をもらっている。⁴¹⁾ ジョン・グリーンは、ヴァージニア教区で多くの要職を務め、有力信徒として教区再興に寄与した。

母のメアリー・アン・ウィリアムズ (一七九七―一八六七年) は、七〇年の生涯のうち三四年を寡婦として

送った。夫を亡くした当初は六人の子どもたちを抱え、苦闘の日々を強いられた。ウィリアムズの幼少時の回顧によると、母は子どもたちが青年として成長するまで、毎日詩篇を一節ずつ必ず暗唱させ、毎日曜日には欠かさず日曜学校に連れていったという。教会の礼拝にも子どもを連れて参列する篤信の人であった。⁽⁴²⁾

長兄のウィリアム・クレイトン・ウィリアムズ（一八二一～一八八八年）は、ウィリアム・アンド・メアリー大学を卒業後、ヴァージニア神学校で学び、⁽⁴³⁾一八四六年に執事に按手された。一八六六年までの二〇年間、ジョージア州スヴォナの黒人伝道宣教師として携わり、その後一年間はジョージア州ローム聖ペテロ教会主任司祭を務めた。一八八〇～一八八四年にはジョージア教区主教座聖堂の聖ルカ大聖堂管理司祭の任にあり、翌一八八五年から病死する一八八八年まで故郷リッチモンドで療養生活を送った。⁽⁴⁴⁾ 聖職者としてのウィリアム・クレイトンは、教区常置委員、教区会主事、聖職試験委員、教区派遣アメリカ聖公会聖職代議員を長年務めるなど、ジョージア教区を代表する司祭であった。アメリカ聖公会伝道局員には一八五〇年代から選出されており、日本伝道が開始された一八五九年一〇月の伝道局会議では、弟ウィリアムズの長崎発信書簡を読み上げている。⁽⁴⁵⁾ 次兄のジョン・グリーン・ウィリアムズ（一八二三～一八七〇年）は、一八四〇年にウィリアム・アンド・メアリー大学に入学し、卒業後⁽⁴⁶⁾は弁護士となり、四六歳で独身⁽⁴⁷⁾で亡くなった。⁽⁴⁸⁾

長姉のメアリー・オジルビー（一八二五～一八六三年）は、一八四四年二月二日に一九歳でヒュバート・ピエール・レフェブル（Hubert Pierre Lefevre）とモニュメンタル教会で結婚した。⁽⁴⁹⁾ レフェブルは、一八一八年四月二日にパリで生まれ、一八六八年七月二六日に他界するまでヴァージニアの教育界で活躍した人物である。彼の経歴をみると、リッチモンドのアン・マリー・「ミード夫人の学校」⁽⁵⁰⁾に七年間勤めたのち、ウィリアムズバーグ女学校の校長となった。⁽⁵¹⁾ このウィリアムズバーグ在住期間は、C・M・ウィリアムズのウィリアム・アンド・メアリー大学在学期間と重なっており、大学初年度の一八五〇～一八五一年にウィリアムズはレフェブル夫妻の住居に下宿している。⁽⁵²⁾ その後、リッチモンドのミード夫人が死去すると、レフェブルはその後継者として、一八五三年

「レフェブル氏の学校」を開校し、オジルビーは学校長の夫を支えた。長兄ウィリアム・クレイトンと同じく、レフェブルも義弟ウィリアムズの海外伝道を後援した。たとえば、ウィリアムズが東洋伝道に向けてニューヨークを出航した直後、一八五五年二月一日付でアメリカ聖公会内外伝道協会外国委員会に義弟への書簡転送を依頼しており、翌年も判明しているだけで三度上海のウィリアムズ宛書簡の転送を要請していた。⁽⁵⁷⁾

次姉のアリスは、一八二七年に生まれ、一五歳のときモニユメンタル教会で堅信を受けた。⁽⁵⁸⁾その後、カーター・H・ハリスンと結婚したが、南北戦争勃発直後の一八六一年七月一九日、彼が南軍の一隊長として戦死したため、アリスは母と同じように六〇有余年の半生を寡婦として過ごし、六八歳で亡くなった。弟ウィリアムズからのアリス宛返書が毎年最低一通、多くて二〜三通あるので、アリスから彼への書簡の数はその数を上回るものと思われる、アリスがウィリアムズとの文通による親交を楽しみにしていたことがうかがわれる。ウィリアムズは、アリスから兄弟の近況や故郷の様子、彼女の相談事などを知る一方で、母と家族とともに過ごした少年時代を毎年述懐しており、彼にとってアリスは、年齢と同様に兄弟のなかでは一番近い存在だったようである。

弟のロバート・F（一八三二〜一八九三年）は、リッチモンドの実業家として、上海在住の兄ウィリアムズから送られた中国製品や日本製品を詰めた箱の受け取り手続きを行ない、ウィリアムズの必要物品の輸送にも力を貸した。⁽⁵⁹⁾ロバートは、一八七八年からリッチモンド市西部の聖ヤコブ教会の教会委員を、一八九一年から同教会委員代表をそれぞれ死去する一八九三年まで務めている。⁽⁶⁰⁾この教会は、一八三九年に設立され、ウィリアムズも海外宣教師として中国へ渡航する一八五五年まで在籍した教会である。ウィリアムズは、一八九三年末に四半世紀ぶりに一時帰国するが、兄弟姉妹のなかで唯一人生存していた弟ロバートがその直前に死去した。

一八二九年七月一八日に生まれたC・M・ウィリアムズは、少年時代にモニユメンタル教会の聖歌隊のメンバーとなった。⁽⁶¹⁾そして、リッチモンドの公立高校を卒業し、一九歳ごろになると学資を得る目的で、従兄のパーレット・アレックサス・Bが経営する雑貨店の店員として働くため、ケンタッキー州ヘンダーソンに赴いた。ケン

タッキー教区では聖パウロ教会に在籍した。⁽⁷⁾その後、リッチモンドに帰郷したウィリアムズは、一八五〇年秋にウィリアムズバーグのウィリアム・アンド・メアリー大学に入学し、初年度は義兄宅から、⁽²³⁾二年度には大学寮から通学した。

ウィリアム・アンド・メアリー大学は、一六九三年にハーヴァード大学に次いでアメリカで二番目に創設された大学である。イギリス王室や大主教の支援のもと、代々聖公会聖職が学長を務めており、ウィリアムズ入学の前年には当時ヴァージニア教区の補佐主教ジョン・ジョーンズが学長に就任していた。一八五二年七月五日の教授会で決定された学位授与者は、卒業生三十六人に対して、学士が八人、修士が一人のみで、そのうち最優秀の修士学位を受けたのがC・M・ウィリアムズであった。⁽²⁴⁾その後、ウィリアムズが中国・日本伝道主教に聖別されたことを受けて、一八六六年七月三日のウィリアム・アンド・メアリー大学の教授会は、満場一致でウィリアムズへの名誉博士号の授与を決議している。⁽²⁵⁾

一八五二年七月二日、ウィリアム・アンド・メアリー大学の卒業式が行なわれた。一三歳のウィリアムズは、ヴァージニア教区の聖職候補生として認可され、同年秋にヴァージニア州北部アレクサンドリアのヴァージニア神学校に入学した。⁽²⁷⁾

四 ヴァージニア神学校時代とウィリアムズの神学的特性

一八二三年に創立されたヴァージニア神学校は、ヴァージニア州フェアファクス郡アレクサンドリアから三マイル、首都ワシントンからは八マイルの場所に位置する。神学校の建つ丘からは、コロンビア地区、ワシントンを通じてチェサピーク湾に注ぎ込むポトマック川や、その周辺の広大な地域が見渡せた。神学校創立時のヴァージニア教区第二代主教ムーアはニューヨーク出身、第三代主教ミードもプリンストンで長老派の影響を受け、第四代主教ジョーンズはプリンストン神学校に在学するなど、アメリカ南部のヴァージニア教区の蘇生はアメリカ

北部の気風に満ちているが、ヴァージニア神学校も同様の特色があった。

最初のヴァージニア神学校常勤教授リユエル・キース (Reuel Keith) は、ヴァーモント生まれでアンドーヴァー神学校に学んだ厳格なカルヴィニストであり、メイン州生まれのジョゼフ・パッカード (Joseph Packard) も、アンドーヴァー神学校に学んだ人である。一八四二年に教授となるジェームズ・メイ (James May) は、ペンシルヴェニア生まれでワシントン・ジェファースン大学を卒業していた。また、一八四一年にオハイオ州のギャンビア大学学長を辞して教授となるウィリアム・スパロー (William Sparrow) も、マサチューセッツ生まれでアイルランド育ち、聖公会系のケニオン大学卒業であった。これら南北戦争以前の最初の六教授は、いずれも北部に生まれて教育を受けており、聖公会系教育機関で学んだのはスパローのみであった。

ウィリアムズが学んだ時代の教授は、パッカード、スパロー、メイの三人である。ハイ・チャーチ系のニューヨークのジェネラル神学校とは対照的に、ヴァージニア神学校は当初から福音主義的であった。とくに、アンドーヴァー神学校で訓練を受けたパッカードやキースは、最初の五〇年間で一三五人の海外宣教師を派遣した同校の伝道精神をヴァージニア神学校に注入した。彼らの伝道熱は、キースの息子を遣清宣教師にさせ、パッカードの娘をブラジル伝道女性宣教師にさせるほどで、ヴァージニア神学校でも初代海外 (中国) 伝道主教ウィリアム・ジョーンズ・ブーンや、初代アフリカ伝道主教ジョン・ペイン (John Payne) を輩出した。ヴァージニア神学校における海外伝道への情熱は、C・M・ウィリアムズの神学生時代には半ば伝統となっていた。

ウィリアムズが入学した一八五二―五三年度の神学校要覧によると、入学資格は原則としてアメリカ聖公会法規にもとづく聖職候補生、全課程は三年、始業は毎年度九月最終水曜日、終業は翌年七月第二水曜日となっている。年度末に教授会による試験が実施された。⁽⁷⁹⁾ 組織神学・キリスト教証拠論担当教授はウィリアム・スパロー、教会史・教会政治・説教担当教授はジェームズ・メイ、聖文学担当教授はジョゼフ・パッカードで、ウィリアムズ入学時の最上級生は六人、二年度生は一人、初年度生は九人であった。⁽⁸⁰⁾ 初年度は、ヘブル語・ギリシャ語学、

聖書学、聖書解釈、啓示宗教の証拠論を、二年度は、組織神学、教会史、続・聖書の批評的研究を、最終年度は、続・組織神学、続・教会史、教会政治、牧会神学の各科目をそれぞれ学んだ。そして、初年度末に釈義論文、二年度末に神学論文、最終年度末には説教の草稿と演習が課せられた。⁽⁸⁾

一九世紀のアメリカ・キリスト教界では、救済神学に関する見解が分化していた。プロテスタント教界では、会衆派、長老教会、オランダ改革教会、ドイツ改革教会など、改革系守旧派が伝統的カルヴィニズムを支柱とする改革神学の理解に救いの確信を見いだそうとした。これに対して、メソジスト、バプテスト、改革系新派のリヴァイヴァリストは、その確信を回心の個人的体験というアルミニアニズム的な展開に求めた。

聖公会では、救済の確信を洗礼と新生という二つの要素に求めた。聖公会の神学者は、まずプロテスタント教界を二分していた予定論を中立化することで、カルヴィニズムとアルミニアニズムという対立要素の調和を図った。ついで、契約神学を援用して洗礼によって神との契約関係に入るといふ契約理解を定義し、必ずしも傾倒する必要はなかったが、回心の体験も可能である成人の新生を提唱した。

アメリカ聖公会における神学的調和の最大の貢献者は、同派設立の立役者でもあるペンシルベニア教区主教ウィリアム・ホワイトであった。彼は、一八三〇年代までアメリカ聖公会総会で議長を務め、創立時から一九世紀前半にかけて教派の指導者として、アメリカのほとんどの聖公会系神学校で聖職者養成のために使用された標準的神学課程と教科書を選定した。この神学的調和に関しては、一八〇一年の総会で同派の教理標準に一部改訂して採択された英国教会三九箇条の注解書として、ホワイトはギルバート・バーネット (Gilbert Burnet) の著書を正式に認定していた。バーネットは、この注解書において、三九箇条第一七条の予定に関する理解は、カルヴィニスト、アルミニアンのどちらも許容できるものとして、中立的立場を提示していたのである。ドルト教会総会以降、二世紀にわたりプロテスタント教会を二分した熾烈な教会論争に対して、アメリカ聖公会は母教会神学者の中立的調和性を踏襲したのであった。

ウィリアムズが在籍したヴァージニア神学校は、アメリカ聖公会の中立的和解路線を同派神学校のなかで最初に敷き、一時カルヴィニズム側に偏向後もこの路線を再生していた。これを主導したのが、一八四一年から一八七四年までヴァージニア神学校の神学教授を務めたウィリアム・スパローである。彼は、カルヴィニストとアルミニアンの論争には中立的立場をとったが、穏健的なアルミニアンの神学的傾向があった。スパローによれば、神の恵み深い贖罪の行為の受諾や拒絶は人間の意思に属している。つまり、カルヴィニズムが説く人間の抵抗がたい神の恩寵や、人間の義認の創始と発端のすべては神の摂理の領域にあるという見解よりも、人類に救いを提供し、その応答を待っている主として神をみるアルミニアンの側に近い神学であった。

ヴァージニア神学校在籍時代、スパローの同僚教授であったパッカードやメイはカルヴィニストであったが、温厚で論争的でもなかったため、神学校の伝統的な中立路線を崩すような混乱はみられなかった。このスパローに学んだウィリアムズが提出した卒業論文のテーマが「信仰義認」であった。スパローの神学的傾向はウィリアムズに少なからぬ影響を与えたのである。信仰義認は、抵抗がたい神の恩寵と人間の自由意思による信仰という、カルヴィニズムとアルミニアンニズムによる救済神学の二定理として、プロテスタント教界を二分する核心の問題となっていた。

C・M・ウィリアムズの神学校卒業論文は、アメリカ南北戦争の際に消失して残存しないが、ウィリアムズは晩年、これを題材に説教を行なっているので、その説教から彼の救済神学を確認してみよう。

一九〇〇年八月二四日付『基督教週報』二六号に載録された同月一二日午前の大津基督教会でのウィリアムズの説教は、ペトロの手紙第一の五章八節を主題とするものであった。説教の冒頭で引用したフィリピの信徒への手紙第二章一二節の「恐れおののきつつ自分の救いを達成するように努めなさい」という章句と、それに続くウィリアムズの言葉「袖手安坐して、神の恩寵は来らず」は、神の絶対性を前提としながら、人間に託された恩寵に応えるのは人間しだいであり、意思、選択、行為をもって人間が主体的に応じることを神は待っているというア

ルミニアンの救済神学を体現している。また、岸和田聖保羅教会の牧師菅寅吉が筆記して元田作之進に寄贈した晩年のウィリアムズの説教（年月日不詳）⁸²では、救済が神のみの働きとして人間側が努力を放棄する傾向を批判し、神の働きによって始まった救いの業を、人間の参加によって成就しなければならぬとし、多様な聖句を例示して、人間側の救済への放任主義や道徳的怠惰を戒めている。そして、「イエスに在る神の恩寵に」を打任し、罪の赦を受け、公会に入りし時、諸君の救の働きは既に始まったのである、然し成就せられたのではない、義とせられたが、然し未だ全く聖とされたのではない」というウィリアムズの言葉からは、アメリカ聖公会の救いの確信であった洗礼と新生の基本的枠組みを読み取ることができる。受洗者はだれでも救いの道に入る現実的な神との契約の始まりとして、神の側からの救いの業によって義とせられ、その人自らの意思でそれを再確認し、積極的な祈りや行為を通して神の業に参加する新生が必要であると説いたのである。ここには、普遍的救済と神の主権との調和、契約神学にみえるアルミニニアニズムとカルヴィニニズムの混在、サクラメントの客観性というカトリシズムとプロテスタントイニズムの福音主義という、アメリカ聖公会の神学的救済根拠が結集されている。

五 ヴァージニア神学校の海外伝道と遣清宣教師任命志願

ヴァージニア神学校では、創立の翌年に伝道問題研究会が結成され、同研究会のもとで、伝道情報の収集、現任宣教師との交信、海外伝道への祈祷、近隣地域や獄中への伝道、論文作成、説教演習などの活動が展開されていた。伝道問題研究会は、ウィリアムズが入学した一八五二年の時点では伝道部と略称され、神学校最古の課外組織であった。

ヴァージニア神学校は、伝道問題に関する啓発を目的に、神学生を全員自動的に伝道部員とした。一八三五年には伝道図書館、伝道地図、定期刊行誌の必要から、会員と後援者の寄金を募り、「未改宗の世界」へ派遣する宣教師を神学校が求めていると訴えた。⁸³このように、伝道対象は当初から海外に向けられており、ヴァージニア

神学校の福音主義的性質は海外伝道への関心に連動していたのである。

数ある課外組織のなかでも、より親近感の強い学生組織は、毎週一晚それぞれの会館で静寂のときを持つ非公式な祈祷集会であった。⁽⁸⁵⁾そこでは、海外に赴いている神学校出身の孤独な宣教師のために、神の祝福を願う即ちや黙祷が捧げられた。初代アフリカ伝道主教ジョン・ペインの神学校時代の日記には、初代海外伝道主教ウィリアム・ジョーンズ・ブーンの一部屋で開かれていた非公式な祈祷礼拝の記述がみられる。⁽⁸⁶⁾個人の部屋でも有志による伝道的情熱は自由祈祷を通して満ちあふれていたのである。

ウィリアムズは、一八五五年六月末にヴァージニア神学校を卒業した。卒業試験は六月最終週の指定日に実施され、六月二八日の木曜日午後に行なわれた卒業式で卒業証書が手渡された。翌二九日午前一時、アレクサンドリヤ聖パウロ教会で神学校卒業生の按手式が始まり、ウィリアムズを含む聖職候補生七人がヴァージニア教区主教ウィリアム・ミードによって執事に聖別された。

一八五三年春、C・M・ウィリアムズは遣清宣教師として海外伝道に赴くことを決意した。そして、それから二年後、ヴァージニア神学校卒業直前の一八五五年四月初旬に、アメリカ聖公会内外伝道協会外国委員会へ公式に任命願書を提出した。⁽⁸⁷⁾

中国伝道主教W・J・ブーンは、一八五三年四月に母校のヴァージニア神学校を訪問し、過去一六年間の中国伝道の成果と展望に関して講演を行なった。その際、神学校初年度生のウィリアムズとリギンズ (John Liggins) を優秀な宣教師になる見込みがあるとして中国に連れていくことを望んだが、ウィリアムズらは最終学年までヴァージニア神学校に残ることを決断した。⁽⁸⁸⁾ウィリアムズが宣教師になる決心をしたのは、ブーン来訪より前の時期であるが、伝道地として中国を選択したことについては、ブーンとの接触が大きかったと思われる。ブーンの母校訪問後、ヴァージニア神学校機関誌『サザン・チャーチマン』(Southern Churchman)には中国伝道関係記事が急増し、一〇月二〇日にはベテルハイムの琉球伝道とペリー艦隊の江戸湾進入の記事が掲載された。

ウィリアムズの遣清宣教師任命は、外国委員会が財政難に陥ってから半年後の一八五五年一月二三日まで待たなければならなかった。⁹⁰ ヴァージニア教区では、外国委員会の財政危機を救済するため、一八五五年五月末の教区会で主教を先頭に六〇〇〇人の聖職信徒の協力を決議した。⁹¹ また、同年五月三十一日付『サザン・チャーチマン』誌上にミード主教とジョーンズ主教の連名で「教書」と「声明と懇請」文を掲載し、献金日を六月第三日曜日にして、他に例をみない巨額の支援金六四〇〇ドルを集めた。外国委員会全体としては、一八五五年六月五日付で五万七〇〇ドル、同年一月一日付で七万一千四百八十ドルが寄せられ、⁹² 同年一月の伝道局会議でウィリアムズらを任命することが可能となった。⁹⁴ しかし、同年度の外国委員会年報によれば、年額六万ドルでは外国伝道事業の運営は不可能であるともされており、⁹⁵ 財政難が解消されたわけではなかった。こうした母教会の海外伝道実務機関の恒常的な財政危機を背負って、ウィリアムズは東洋伝道に赴いたのである。

一八五五（安政二）年一月三日、南半球の荒波に進路を向けたシドニー経由上海行きオナイダ号は、ウィリアムズとリギンズを乗せてニューヨークを出航した。⁹⁶ ウィリアムズはこのとき二六歳であった。

第五節 中国ミッシヨンの創設

一 プロテスタント中国伝道

一八〇七年、ロンドン伝道協会（London Missionary Society）から派遣された最初のプロテスタント遣清宣教師ロバート・モリソン（Robert Morrison）が中国を訪れた。C・M・ウィリアムズの中国伝道は、それから約半世紀後のことである。

モリソンの中国派遣後、一八三二年までにウィリアム・ミルン（William Milne）、W・H・メドハースト（Walter Henry Medhurst）など、ロンドン伝道協会から五人の宣教師が中国に派遣された。これにオランダ海

外伝道協会派遣の K・F・A・ギュツラフ (Karl Friedrich August Gutzlaff)、英国教会伝道協会、イギリス聖書協会などが続き、中国伝道の創始期は対中外交で他の欧米列強諸国をリードするイギリスの宣教師が活躍した。ただし、この時期の中国における伝道活動は、翻訳・出版事業や、アジア周辺地域での華僑や現地民への教育事業に限られた。中国本土は禁教下の鎖国(海禁)状態だったからである。

イギリスに後続したのがアメリカ諸派の宣教師であった。一八三〇年にアメリカン・ボードの E・C・ブリッジマン (Elijah Coleman Bridgman) とアメリカ海員友の会のデイヴィッド・アビール (David Abeel) が広東に到着し、これにボード派遣の E・ステイーヴンス (Edward Stevens)、I・トレイシー (Ira Tracy)、S・W・ウィリアムズ (Samuel Wells Williams) が加わった。このうち中国を訪れたバプテスト宣教師に続くのが、一八三五年に宣教師を広東に派遣したアメリカ聖公会である。

アヘン戦争でイギリスに敗れた中国は、一八四二年に南京条約を締結し、五港を開港することで本土の部分的開放を承諾した。これにより、開港地での宣教活動が可能になり、英米プロテスタント宣教師は大きな転機を迎えた。さらに、一八五六年のアロー号事件を契機とする戦争に中国が敗れた結果、一八五八年の天津条約で中国本土は欧米人に完全に開放されることになり、清朝の鎖国政策という伝道事業上の障害は払拭された。

一方、宣教師たちは中国本土の鎖国状態に苛立ちを隠してこなかったが、こうした欧米列強の軍事外交によってもたらされた中国の開国を逡巡しながらも合理化した。このことは、伝道の目的と手段が錯綜する矛盾を抱えた両極性に、中国プロテスタント伝道が特徴づけられることを意味していた。⁹⁷⁾ 遣清宣教師は、「中国人の心に与えたであろう修復し得ない損傷を黙認した」ことによる官憲側の遺恨・警戒、知識層による反感・敵視・拒絶、民衆からの憎悪・攻撃・暴動といった排外感情に遭遇することを覚悟しなければならなかったのである。⁹⁸⁾

欧米の列強諸国は、条約交渉をはじめ在清外交機関の通訳や情報収集について、かなり宣教師に頼っていた。たとえば、プロテスタント最初の宣教師モリスンは、イギリス東インド会社広東事務所の中国語通訳官を務めて

おり、一八三四年に貿易監督官制度に代わったのちは、その首席中国語通訳官にギュツラフが就任し、さらにモリスンの息子も同職に就いた。また、アメリカの在清外交機関では、一八四四年の望厦条約以後、ブリッジマンが書記官、一八五七年まではアメリカン・ボード宣教医ピーター・パーカー (Peter Parker) が駐清アメリカ弁務官を務めていた。さらに、一八五八年の天津条約の交渉では、S・W・ウィリアムズとアメリカ長老教会のW・A・P・マーティン (William Alexander Parsons Martin) の外交努力によって、宣教師と同様に中国人改宗者や聖職者も清朝政府からの妨害なしに、キリスト教を伝え実践する権利が保証された¹⁰⁾。

これらの例からわかるように、中国との外交活動に携わった宣教師が果たしてきた役割は小さくなかった。宣教師は、中国人のキリスト教改宗への障害が政治的なものであると確信し、イギリスとその連合軍による侵略後の劇的な成果を期待したのである。そして、このことは、中国内地にキリスト教が解禁される一八六〇年以降、中国人の排外感情の高まりに拍車をかけた。

宣教師は、中国への砲艦外交に積極的に貢献し、貿易商からは渡航費免除や伝道事業の援助など多方面で経済支援を受けるなど、国家、産業、宗教の密接な相互関与のなかで中国伝道を推進した。外交官は条約締結を、貿易商は利潤追求を、それぞれ主要な目的としていたのに対し、宣教師の使命は、中国人の魂の覚醒と中国社会の改良という西洋文明の優越性を前提とした「異教徒」の内面的変革であった。そのために、その困難な目的遂行における段階的な突破手段として軍事力の行使が正当化されたのである。この軍事外交を追認する方針が、中国本土の開放と中国民心の閉塞という両刃の剣であったことを、一九世紀中葉の遣清キリスト教宣教師は実感しなければならなかった。

二 草創期のアメリカ聖公会中国伝道

最初のアメリカ聖公会遣清宣教師であるヘンリー・ロックウッド (Henry Rockwood) とフランシス・R・ハ

ンソン (Francis R. Hanson) がニューヨークのジェネラル神学校に在籍した当時、オーガスタス・ライド (Augustus F. Lyde) とダニエル・コビア (Daniel Cobia) という二人の学友がいた。彼らは、初代中国伝道主教となるウィリアム・ジョーンズ・ブーンに影響を与えた。

ロンドン伝道協会最初の遣清宣教師ロバート・モリスンやギユツラフの著書を読んだコビアは、アメリカ聖公会の定期機関誌『チャーチマン』(Churchman) に中国伝道に関する報告を寄稿し、これがブーンの目に留まることになった。⁽¹⁰⁾ 一方、一八三四年春、ライドはアメリカ聖公会内外伝道協会の初代外国委員会総主事となるジェームズ・ミルナー (James Milner) に中国伝道開始と宣教師志願を要望し、前者については同年五月一三日の伝道局年會會議で決議された。⁽¹¹⁾ けれども、ライドは遣清宣教師として認められながらも、流行性の肺結核であると診断されたため、中国渡航を断念しなければならなかった。このため、ライドは、中国赴任ができなくともアメリカ国内でできるだけのことをするとの使命感のもと、中国伝道への関心を喚起すべく、全米の聖公会所属の諸教会や神学校を遊説した。こうして当時ヴァージニア神学校の最終学年度であったブーンを中国伝道へ導いたのである。⁽¹²⁾

ライドとコビアは、健康不良のため中国渡航を断念したが、彼らの学友のヘンリー・ロックウッドと、当時メリーランド州の教会牧師であったフランシス・R・ハンスンが、一八三五年二月に遣清宣教師に志願した。二人は、同年六月二日にモリスン号で渡航し、一〇月四日に広東に到着、アメリカ聖公会による中国伝道が開始されることになった。彼らが住居を構えたのは、ギユツラフが勧めたオランダ植民地ジャバ島北西岸の湾岸都市バタヴィア (現・ジャカルタ) であった。

一八三七年一月一七日、アメリカ聖公会伝道局會議はブーンを遣清宣教師に任命した。ブーン夫妻は、同年七月八日にボストンを出航、一〇月二二日にバタヴィアに到着し、先行宣教師と合流した。けれども、ハンスンは、中国語習得の難度を理由に、翌一八三八年一月にバタヴィアを去った。⁽¹³⁾ ロックウッドも、一八三九年五月に

健康問題から休暇を取ってマカオに赴き、同年九月に帰米し静養していたが、一八四〇年には健康不良で辞任した。彼らのバタヴィアでの活動は、中国人教師による漢語の古典指導と、宣教師が新約聖書と簡単なキリスト教教理を現地の中国人青少年少女に教えるという学校経営が主体であった。⁽¹⁶⁾

ブーンは、一八三九年に学校在籍の少年一人への二か国語教育を目的として寄宿制教育を開始したが、アメリカ聖公会伝道局では中国の鎖国（海禁）外交を懸念し、中国伝道の断念をブーンに示唆していた。これに対して、ブーン夫妻は中国本土の開国を期待し、一八四一年二月にマカオに移住した。司祭、医師、弁護士資格を保持していたブーンは、マカオの病院での医療分担やイギリスのチャペルでの説教を依頼されて活動したが、彼が習得した中国語は厦門語であり、マカオでは理解されないと認識があった。そこで、一八四二年六月にアメリカン・ボードの宣教師となったデイヴィッド・アビールとともに、アヘン戦争でイギリス軍が占領した中国本土の厦門へと活動拠点を移し、開拓伝道を開始した。

一八四二年八月二九日には厦門を開港地とする南京条約が調印されたが、その翌日、ブーンの妻サリーがコレラにより死去した。⁽¹⁶⁾ このため、二人の幼児を抱えたブーンは、東洋の地を踏んでから五年半後の一八四三年春、厦門を後にした。

帰米したブーンは、アメリカの遊説先で中国伝道への支援と献身志願をよびかけた。その結果、女性教育宣教師エリザ・ジレット (Eliza Gillett)、エンマ・ジョーンズ (Emma G. Jones)、メアリー・モース (Mary Morse)、およびヘンリー・ウッズ (Henry Woods) とリチャードソン・グラハム (Richardson Graham) の二組の宣教師夫妻が中国ミッシェンのスタッフとして増強された。

ブーンは、一八四四年一〇月のアメリカ聖公会総会で「厦門および伝道局が以後選定する他の中国諸地域」管轄の主教に選出され、初代海外伝道主教に聖別された。そして、外国委員会はブーンと協議し、中国の伝道（ミッシェン）拠点を厦門から上海に変更することにした。同年一二月一四日、ブーンと新任宣教師一行は

ニューヨークを出航し、喜望峰経由で一八四五年四月二四日に香港に到着、六月一七日に上海へ入った。まだこのときは上海租界（外国人居留地）がなく（上海租界は同年一月二九日に発足）、ブーンは上海県城壁外側に住宅兼用の寄宿校を設置した⁽¹⁰⁾。なお、ジレットとウッズは引退し、代わって同年一月一九日にE・W・サイル（Edward W. Syle）夫妻が赴任した。

ブーンは住宅兼寄宿校は、上海北境を東西に流れる蘇州河と、上海の東側を北へ曲線を描きながら流れる黄浦江が交差する蘇州河北岸一帯の荒地地に建てられた。この虹口とよばれる地に、一八四六（弘化三）年三月一日にチャペルと校舎用家屋を建造し、一八四八（嘉永元）年にはミッション本部を移転した。ここがのちのアメリカ租界の基盤であり、一八五〇年一月には上海県城内にキリスト教会が完成した。

この間、一八四七年一月には宣教師グラハム夫妻が健康不良で引退し、同年八月にP・D・スボルディング（Phineas D. Spalding）が赴任した。スボルディングは、一八四九年に帰米の途にいたが、その航海上で台風に遭い、行方不明となった。一方、中国スタッフの補強は積極的に進められ、同年八月に女性教育宣教師キャロライン・テニー（Caroline Tenney）、一八五一年三月に女性教育宣教師リディア・フェイ（Lydia M. Fay）、同年二月二五日にはロバート・ネルソン（Robert Nelson）夫妻、クリーヴランド・キース（Cleveland Keith）ジョン・T・ポインツ（John T. Points）が上海に到着した。

一八五二年には三月に大地震、七月に暴風、一月には海水が遡上して溢れるなど、天災が続発するなか、秋にブーンは医師の勧告に従って療養帰国を決意した。ブーンは、サイル、キース、ネルソンを常置委員に任命し、上海ミッションの管理を任せた。

一八五三年一月三〇日にニューヨークに到着したブーンは、同年四月にヴァージニア神学校を訪れ、神学生のC・M・ウィリアムズ、ジョン・リギンズと面談を行なった。これがきっかけとなり、彼らは中国への伝道を決意した。なお、同年二月にはサイルも健康を害し帰米した。

ブーン帰米直後の一八五三年三月、中国では太平天国軍が南京を占領し、「天京」と改名するなど、内乱が上海に迫りつつあった。同年九月七日には上海で蜂起した秘密結社の小刀会が上海県城を占拠し、一八五五年二月に鎮圧されるまで反乱が続いた。こうした状況のなか、ブーンは、一八五四年四月に新任女性宣教師E・J・レイ(Emma J. Wray)とJ・R・カノーヴァー(Jeanette R. Conover)を連れて帰任した。ウィリアムズとリギンズが上海虹口の中国ミッション本部に到着するのは、その二年後の一八五六年六月二十八日である。

一八五六年六月末における教育事業の実態をみると、アメリカ聖公会内外伝道協会外国委員会の財政難から、男女の寄宿校の人数を四〇人までに制限せざるを得ず、通学校も二五〇人が在席する一二校の閉鎖を強いられた。それでも、現地宣教師の私財によって、男女の寄宿校それぞれ四〇人ずつ、通学校二校で五〇人、女子通学校四校で一〇〇人、総計二三〇人に対して教育を実施していた。

三 上海郊外巡回伝道と常駐定住伝道

アメリカ聖公会遣清宣教師に任命されたウィリアムズは、一八五五年一月三〇日、シドニー経由上海行きオナイダ号に同僚リギンズとともに乗船し、南半球航路で東洋を目指してニューヨークから出航した。当時、二六歳独身であった。

シドニーからは別便で上海へ向けて渡航し、七か月後の一八五六年六月末に上海租界に上陸した。ウィリアムズは、一八五九年六月に遣日宣教師として長崎に渡航するまで、三年間を中国で過ごした。それは、一八五五年二月に小刀会の上海県城占拠が解放されてから、一八六〇年の太平天国軍による上海攻撃開始までの、上海におけるつかの間の比較的平穏な時期であった。

ウィリアムズとリギンズは、上海租界のミッション拠点で中国語を学習しながら、一八五七年一月一日にブーンから司祭按手を受けた。そして、早くも同年五月から江蘇省東部の上海近郊で中国語による説教をとま

う巡回伝道を開始した。同年一〇月になると、上海租界から往復日程が一日を超える地域へと活動範囲を広げ、上海近郊の北、西、南部地方へ往復二週間を要する本格的な開拓伝道も敢行した。これは、暴徒の襲撃に遭うだけでなく、清朝地方官憲によって逮捕され、宣教師側の条約違反が問われる危険性をともなうものであった。

こうした上海近郊伝道の前例としては、一八四八年三月にロンドン伝道協会の宣教師メドハースト、ウィリアム・ロックハート (William Lockhart)、ウィリアム・ニューアヘッド (William Muirhead) らが暴徒に襲撃される青浦事件があった。この事件では、欧米列強と清国との国力の差を反映して、宣教師側の条約違反は不問にされ、在留領事が中国側に責任の所在を問うという外交問題に発展した。

ウィリアムズとリギンズは、一八五八年三月から一年余りにわたり、外国人地図に不掲載の江蘇省常熟に開拓定住伝道を行なった。一八五八年の天津条約によって外国人の中国内地進出が認められる直前の時期であり、暴徒襲撃の危険や宣教師側の不法在在を問われる可能性があったが、彼らは中国の国情を察したうえで、勇壮果敢な冒険と認識していた。二人が家族を同伴しない独身宣教師という身分にこだわっていたのは、このためである。ウィリアムズは定住伝道中、上海スタッフの人員不足のため、いったん上海に戻ったが、常熟に残ったリギンズは一八五九年四月に起きた暴徒襲撃事件に巻き込まれて負傷し、事件の五日後、ウィリアムズが常熟からリギンズを連れて帰った。その後、天津条約により常熟定住伝道事業は合法となったものの、中国ミッションの人員不足から断念せざるを得なくなった。

第六節 日本ミッションの開設

一 最初の遣日プロテスタント宣教師

リギンズは負傷する前から病身であったが、療養するか帰国するかについて、日本の長崎から上海に戻って

たバプテスト教会宣教医 D・J・マガウアン (Daniel Jerome Macgowan) に相談すると、日本での療養を勧められた。日米修好通商条約の発効以前にリギンズの来日・滞日が可能であったのは、長崎奉行によって税関業務などを担当する日本人通詞（通訳官）への英語教師の身分が認められていたからである。こうして、リギンズは日本で療養するため、英語教師を務めていたマガウアンの後任となった。

一八五九年五月二日にメリーランド号で来日したりギンズは、月・水・金曜日に八人の通詞に対して英語の授業を行なった。同年五月二六日のリギンズの書簡によると、アメリカ聖公会外国委員会による遣日宣教師任命書を受け取ったことに言及しており、日本における宣教師としての召命感が伝えられている。¹¹³ ウィリアムズも遣日宣教師任命書を上海で受信したが、彼以外の宣教師が不在の上海ミッションを管理しなければならぬ立場にあったため、すぐに来日することはかなわず、六月二三日によりやく上海を出航できた。¹¹⁴ この二人が最初の来日プロテスタント宣教師となったのである。

二 アメリカによる対日外交

徳川幕府のいわゆる鎖国（海禁）政策から二〇〇年が経過した一九世紀の日本へは、アジア・アフリカ諸国を植民地化していく欧米列強の軍事外交と資本主義経済の波が到達しようとしていた。一八五四年に幕府が開国したのち、安政の五か国条約とよばれる対日通商条約を締結した欧米列強諸国は、アメリカ、イギリス、フランス、ロシア、オランダである。

すでに琉球には、一八四三年一二月にイギリス船が、翌一八四四年四月にはフランス船が通商・交易目的で来航していた。フランスは、アヘン戦争で中国の五港を開港させた南京条約を携え、フランス人カトリック宣教師 T・A・フォルカード (Theodore Augustin Forcade) を琉球の地に残していった。二年後の一八四六年五月には琉球最初のプロテスタント宣教師として、琉球海軍宣教師団の英国教会宣教医 B・J・ベッテルハイム (Bernard

Jean Bethelheim) が渡来した。ベッテルハイムは、その後八年余り琉球語への聖書翻訳に意を注いだものの、一八五四年に日米和親条約を締結して日本を開国させたのち、琉球に寄港したペリー艦隊の船に乗って琉球を去った。

当時の日本への来航船は、日本の海上漂流民の送還を目的とするアメリカ捕鯨船や、日本との交渉を目的とする政府派遣のアメリカ軍艦やロシア軍艦であった。一八四五年にアメリカ捕鯨船マンハタン号が江戸湾に入り、翌一八四六年にコロンバス号、一八四九年にプレブル号、一八五三―五四年にはペリー艦隊というように、一九世紀半ばにアメリカ政府派遣の軍艦の来航が続いた。アメリカは、他の列強諸国を制して対日初動外交をリードし、日本を開国と国際貿易へと導いたのである。

日米和親条約を実現させた M・C・ペリー (Matthew Calbraith Perry) や、日米修好通商条約を締結させたタウンゼント・ハリス (Townsend Harris) による諸条約は、砲艦外交による不平等条約とはいえ、敗戦条約でなく交渉条約であった。したがって、日本では、宣教師が中国で経験したような列強の軍事的勝利による開国に連動した伝道という経緯への葛藤はなく、幕府が警戒した伝道による日本への侵略的意図を否定することは可能であった。それだけに、条約上外国人居留地や遊歩規定に拘束された遣日宣教師は、清国政府とは相違してまだ国威を保つ幕府から、条約破棄や在日外国人の国外追放につながらない慎重な行動が求められた。

隣国の中国で伝道していたアメリカ聖公会宣教師は早期から日本に注目し、日本伝道の可能性を模索していた。けれども、アメリカ母教会の腰は重く、アメリカ聖公会伝道協会が動き始めるのは、ペリーによる開国以後の諸条約で得られた成果の変遷に呼応してのことであった。幕府の開国後、最初のアメリカ駐日領事としてハリスが任命されるが、この領事職を求めてのアメリカ聖公会遣清宣教師の水面下での鋭敏な動きは、アメリカ聖公会による日本本土への最初のプロテスタント宣教師の派遣をうながすことになった。彼らのなかでは、他の教派と競合する意識が強く働いており、日本におけるプロテスタント伝道は、欧米列強諸国間の外交競合と並走する

かのごとく、その出発から教派乱立の様相を呈していた。そして、アヘン戦争の勝利により対中外交を主導したイギリスのプロテスタント教派が対中宣教を主導したように、対日宣教の主導を握ったのは、対日初動外交を主導したアメリカのプロテスタント教派であった。

その後、アメリカは、一八六一～六五年の南北戦争により国力を疲弊させたため、対日外交の主導をめぐっては、幕末の政争で倒幕派を後援したイギリスと、幕府を後援したフランスが競合した。結局、明治政府を樹立した倒幕派側についたイギリスが主導権を握ったが、対日宣教に関してはアメリカのプロテスタント教派がその後を主導し、対日外交はイギリス、対日宣教はアメリカという、ねじれ現象が日本ではみられることになった。

三 日本ミッシヨンの構想―日米和親条約―

ペリーが一八五四年三月三十一日に日米和親条約（神奈川条約）に調印したという情報を中国で得たアメリカ聖公会中国伝道主教ブーンは、同年五月六日の上海発信書簡で「秘密」事項に言及した。それは、中国ミッシヨン・メンバーの聖職候補生ジョン・T・ポインツを日本への調査員として派遣することを決めたいうえで、アメリカ聖公会内外伝道協会外国委員会に中国ミッシヨンの支部として日本ミッシヨンの設立を裁可するよう求めるものであった。¹⁶これは、のちのアメリカ聖公会内外伝道協会による日本本土への最初のプロテスタント宣教師派遣の決議に先立つこと、四年九か月も前のことであった。このブーンの提案に対し、外国委員会は同年九月一二日の中国準委員会で検討を行なったが、『スピリット・オブ・ミッシヨンス』誌の一八五五年二月号には、財政難を理由に日本ミッシヨン開設への消極的なコメントが掲載された。¹⁷

ブーンは、一八五四年一二月一日付書簡でも、ポインツが日本探索旅行の機会を待っていると述べていた。¹⁸さらに、翌一八五五年三月七日付書簡では、ポインツを下田在任の権利を持つ領事または領事代行に任命してもらうように、大統領をはじめアメリカ政府要人に働きかけてほしいと外国委員会に要請した。この書簡でブーン

は、アメリカ聖公会が他派との競争を制して、日本で最初のプロテスタント教会を設立する望みを強く表明した。¹²⁾

結局、駐日アメリカ総領事については、一八五五年八月四日付の大統領令でハリスが仮任命され、アメリカ聖公会中国ミッションによる駐日領事職獲得のための水面下工作は奏功しなかった。ペリー艦隊とともに来日しペリーの通訳官を務めた経験を有し、日本に関して豊富な知識を持つS・W・ウィリアムズも、アメリカ聖公会内外伝道協会の要請に応じて広東から送信した一八五五年一〇月一三日付書簡で、日本伝道に対しては慎重な態度が必要であることとその困難性を指摘していた。¹³⁾ こうして、開国直後から構想が打ち出されたアメリカ聖公会の日本ミッション創設案は中断を余儀なくされた。日本伝道に新たな展望が開けるのは、三年後の下田条約締結後のことであつた。

四 日本伝道への機運―下田条約―

ウィリアムズとリギンズが上海に上陸した二か月後の一八五六年八月、駐日アメリカ総領事ハリスは条約改正全権大使として下田に来港し、一八五七年六月に下田条約の調印にこぎつけた。この条約でアメリカ側に承認された下田、箱館両港地でのアメリカ市民の居留許可および領事裁判権は、日本ミッション創設の待望者にとって大きな前進となった。リギンズは、これを外国委員会に報告した際、条約締結後に下田を訪れたポーツマス号W・A・フート艦長による「おおよげにキリスト教教理を教える自由が必ずしも在日宣教師にあるわけではないが、宣教師とその家族は条約で規定された実施日から下田と箱館に住むことができる」という言葉を伝えている。¹⁴⁾

これとほぼ時を同じくして、一八五七年七月に下田に入港した米艦ポーツマス号に乗船していた海軍士官の書簡が、「日本伝道への道は開かれた」と述べて宣教師二人の日本派遣を訴えるブーン書簡¹⁵⁾とともに、『スピリット・オブ・ミッションズ』誌の一八五八年三月号に掲載された。海軍士官が強調したのは、①下田条約の実施日である一八五八年七月四日¹⁶⁾以降に来日する宣教師は、日本人が英語(アメリカ語)を習得することを切望してい

る状況に対応して早急に学校を設立すること、②宣教師の日本語習得には中国語の知識が非常に有利であること、の二点である。この書簡は全米に反響を呼び起こし、『スピリット・オブ・ミッションズ』誌の一八五八年八月号では、ニューヨーク聖マルコ教会から日本伝道へ二〇〇ドルの寄付が届いたことが報じられている。

下田条約の締結を契機に、フート艦長、海軍士官、ブーン、リギンズらの書簡がアメリカに届いた一八五八年春ごろには、外国委員会が日本ミッション開設に賛意を示していたことがうかがわれ、アメリカ聖公会においても日本ミッション創設への機運が熟していった。それは、伝道局が正式に日本伝道開始を決議するほぼ一年前のことである。こうして、日本ミッション創設への歩みは下田条約締結後に確実に前進した。

五 好機到来―日米修好通商条約―

一八五八年七月二九日に日米修好通商条約が調印されたのに続き、同年にはオランダ、ロシア、イギリス、フランスとも同様の条約が結ばれた。いわゆる「安政の五か国条約」である。これにより、二市五港の開場、外国人居留地内の外国人の信教の自由と礼拝堂の設置、自由貿易などが認められた。また、神奈川、長崎、箱館の開港実施日は、アメリカとオランダについては一八五九年七月四日となった（イギリスとロシアは七月一日、フランスは八月一五日）。

リギンズは、中国江蘇省常熟発信の一八五八年八月一六日付書簡で、次のように述べている。

長く閉ざされていた日本が、ようやくプロテスタント・キリスト教界の伝道開始のために開かれました。このもつとも興味深い国にすぐにも二人または三人の宣教師が派遣されることを熱望しています。

そして、同年九月一六日の書簡の追伸では、駐清アメリカ弁務官ウィリアム・B・リード (William B. Reed) 一行がミネソタ号で日本に向けて出航したことが報告された。この一行には、広東のS・W・ウィリアムズ（駐清アメリカ公使館書記官、元アメリカン・ボード宣教師）、寧波のW・A・P・マーティン（アメリカ長老教会

宣教師)、上海のE・W・サイル(アメリカ聖公会遣清宣教師)という三人の「ベテラン宣教師」が乗船していた。また、リギンズはこの訪日を契機に、アメリカ聖公会が日本における最初の教会になることを望んでいると送信している⁽¹⁰⁾。

ウィリアム・リード一行は、同年九月二〇日早朝に長崎入港、一〇月七日に出港という二週間半の日程で日本を訪れた。この長崎滞在中にサイルは、長崎奉行、役人、通詞(通訳官)らと幾度も面談し、住居付の英語教官として来任してほしいと熱心に招請されたことを本国に報告している⁽¹¹⁾。そのうえで、長崎で「すぐにより働きを開始することが、われわれの教会にとって一つの純真な事からであり、率直な義務であろうとの結論に達しています」と述べていた⁽¹²⁾。

一方、一八五八年一〇月にはアメリカ聖公会第二三回伝道局年会が開催され、その初日に外国委員会は次のように表明した。

外国委員会には大きな開放が起きている日本帝国でミッションを確立するよう主張され続けており、この目的のために数百ドルの寄金がある。もし必要な人材と財源が自由に確保されれば、外国委員会はその要求に非常に喜んで応じるであろう⁽¹³⁾。

さらに、この伝道局会議の三日目に開かれた伝道局特別委員会は、以下のように、日本ミッションに前向きな姿勢を示した。

驚くべき神の摂理によって、東洋は今やますます多く開放されている。われわれが日本へ入るときはまだ到来していないが、人気がありながく射程に入っていた帝国にわれわれの目を定め、適任の人材が獲得され得るときには、いつでも近づきやすいときに予備的探索を期することは適切である⁽¹⁴⁾。

長崎では、すでにサイルがこの「予備的探索」を実践し、日本伝道への好機が到来しているという感触をつかんでいた。また、この訪日旅行に外交官として同行したS・W・ウィリアムズは、今回で四度目の来日であった

が、日本ミッション創設の展望に明るい兆しが訪れているという内容の書簡をアメリカ聖公会に送っている。彼によると、①日本はおそらくいくつかの点で他のどこよりも困難ではあるが、興味深いこと、②言葉は難解で、国民は詮索好きで、騒々しく、ずる賢く、感情においては自己弁護的であり、迷惑な密偵組織があること、などが指摘された。そのうえで、選ばれる遣日宣教師は忍耐強く、慎重で、飽きることのない親切、習得への適性、これらの資質を備えていることが求められるであろうと述べている。そして、アメリカ聖公会伝道局が日本に入る準備をしていることを知って喜んでおり、日本ミッションの進行と方法に関して機会があればお役に立ちたいと自らの意思を示した。⁽¹⁵⁾

この訪日旅行の最終日にあたる一〇月六日付で、サイルは駐日アメリカ総領事ハリス宛に書簡を送っている。その内容は、長崎伝道の好機が訪れたことを伝える一方、よりよい開始が見込まれる他の開港地の情報提供を求めたものであった。これに対して、十一月一三日付で下田発信のハリスからの返書が上海のサイルのもとに届いた。⁽¹⁶⁾

S・W・ウィリアムズは通商貿易港としての評価から長崎を、ハリスは首都江戸にもっとも近いというメリックから神奈川を、それぞれミッション候補地として推薦した。二人の共通点は、日本人に英語を教え、同時に自らも日本語習得の機会を兼ねる学校を開き、無料奉仕する医師の派遣の有効性という認識であり、ともに日本ミッション開始の決断を支持したのである。また、サイルは自身の訪日記とハリス書簡を外国委員会に送って日本ミッションの開設を訴え、リギンズも一八五八年一〇月二二日の書簡で日本ミッション開設を切望する意思を再度表明した。⁽¹⁷⁾

サイルやS・W・ウィリアムズ、ハリスらの書簡は、日本ミッション創設の好機が到来したという認識で一致しており、彼らに対する信頼度は、アメリカ本国においても高かった。その結果、一八五九年初めにペリーとハリスの所属教派でもあるアメリカ聖公会内外伝道協会伝道局が他派に先駆けて、ついに日本ミッション

の創設を決断したのである。

六 日本ミッション創設決議

アメリカ聖公会内外伝道協会外国委員会では、日米和親条約（神奈川条約）、下田条約（日米約定）、日米修好通商条約と、アメリカの主導による諸条約の締結後、つぎつぎに送信されてくる情報を分析し、日本の開国度を見極めつつ日本ミッション開設の機会を検討していた。そして、一八五九年二月八日、外国委員会は「日本帝国においてミッションを開設することは適宜と判断する」という決議を正式に採択した。⁽¹³⁾ この決議は、翌週の二月一四日に特別委員会で審議され、中国準委員会経由で採択されたのち、日本ミッションの創設が正式に決定されたのである。そのほか、以下のような事項が決議された。

- ・ 中国語と日本語の類似性を考慮し、すでに中国語を習得している二人の遣清宣教師ウィリアムズとリギンズを遣日宣教師として任命すること。
- ・ 日本の長崎を最初の伝道地とすること。
- ・ 宣教医一人を募集し任命すること。

・ 現時点ではこの新設日本ミッションを中国伝道主教の管轄下に置くこと。⁽¹⁴⁾

日本ミッションの創設に関する議事と決議の全文は、『スピリット・オブ・ミSSIONズ』誌の一八五九年三月号に掲載され、全米の読者に届けられた。

日本ミッションが中国伝道の管轄下に置かれたことは、日本ミッションへの寄金があった中国ミッションの財庫に入ることを意味した。この財源問題とからんで、一八五九年一〇月の伝道局会議では、新設の日本ミッションを独立管轄地として認めないことが論議の対象となった。また、伝道地を長崎に選定したのは、長崎奉行と当局が保護と奨励と物資の供給援助を約束したというサイルの訪日によって得られた情報を、摂理の召命とし

て外国委員会が重視したことにもとづく判断であった。⁽¹⁰⁾しかし、その約束はあくまで来日する英語講師に対してのものであり、宣教師に言及されたものではないことを外国委員会は明確に認識していなかった。このことは、禁教令下の日本での活動が制限される開拓遣日宣教師の肩に重くのしかかったのである。

日本ミッション創設の決議後、外国委員会代表派遣団はブーンとともにフィラデルフィアを訪れた。ここでは、一八五九年二月二〇日の市内諸教会の日曜礼拝における特別献金、月曜の晩に開催された宣教会議、市内数教会による日本への寄金決議などを通して、日本ミッション開設への反応は大きな盛り上がりを見せた。⁽¹¹⁾同年一〇月の外国委員会年報によると、日本ミッションに対して数千ドルに及ぶ寄金が報告されており、このなかには国内伝道の辺境地であるアイオワやオレゴンなどの子どもたちからの尊い献金も含まれていた。⁽¹²⁾

一八五九年三月八日の外国委員会は、『スピリット・オブ・ミッションズ』誌や他の誌上で日本に関する特集を臨時に組むことに触れるとともに、ウィリアムズとリギンズに遣日宣教師としての任命を通告したことを報告した。⁽¹³⁾また、同年三月二日には滞米中のブーンが行なった全米の遊説により、中国伝道のために六〇〇〇ドルの寄金を得たことが報告されている。⁽¹⁴⁾さらに、ウィリアムズとリギンズが抜けた中国ミッションの再生を図るため、一挙に一〇人の遣清宣教師を追加することを決議した。⁽¹⁵⁾その結果、日本ミッションの創設とともに、弱体化していた中国ミッションも増強され、一八五九年にアメリカ聖公会の東洋伝道は足並みをそろえて再出発することになった。

当時、およそ隔週に一度開かれていた外国委員会は、この新事業に対応するため、日本ミッション開設の決議直前からしばらくの間、ほぼ毎週開催されるようになった。また、一八五九年に発行された『スピリット・オブ・ミッションズ』誌の多くは、日本ミッションに関する記事が巻頭を飾り、ほぼ毎月日本の情報がこの月刊誌に掲載されるなど、日本伝道への期待はいやがうえにも高揚していった。懸案であった宣教医については、一八五九年九月一三日の外国委員会に医師H・エルンスト・シュミッド（H. Ernst Schmid）の願書が提出され、

中国準委員会を経て、同年九月二〇日の外国委員会で正式に遣日宣教医への任命が決議された。⁽¹⁷⁾ こうして、日本ミッション創設決議の七か月後には、幕末日本への伝道態勢がアメリカ聖公会によって整えられることになった。

第七節 ウィリアムズ来日後の伝道

一 ウィリアムズの長崎時代

ウィリアムズは、来日した一八五九年六月末から三年間、長崎の黄檗宗聖寿山崇福寺の後山にある広徳院に住み、⁽¹⁸⁾ その後の四年間は東山手居留地五番の宣教師館に居住した。同僚のリギンズは、一足先に一八五九年五月に病氣療養目的で来日していたが、一八六〇年二月に病身を理由に離日した。また、一八六〇年八月に来日した後続の宣教医H・E・シユミッドも健康を害したため、一八六一年一月二十五日に帰米した。⁽¹⁹⁾

幕末の禁教令下の長崎に独り残されたウィリアムズは、密偵の眼をかくぐり訪れる日本人から、日本の宗教、文化、生活習慣、時事情報などの吸収に努めた。その結果、来日一年三か月余りで日本語を自由に話せるようになり、⁽²⁰⁾ 来日二年半後には主禱文（主の祈り）、使徒信経、十戒の三要文を和訳した。⁽²¹⁾ 一方、破邪僧も異教（キリスト教）探索のため、求道者を装ってウィリアムズに近づき、長崎では長州藩士の高杉晋作と幕吏の前島密がウィリアムズを訪ねている。アメリカの実情を尋ねる高杉に、ウィリアムズは一般市民も大統領に就任できるという政情を話した。⁽²²⁾ また、日本の近代郵便制度の父といわれる前島密に、通信事情、郵便制度を最初に教えたのもウィリアムズである。⁽²³⁾ 前島は、ウィリアムズの意見に啓発されて第一五代将軍徳川慶喜に漢字廃止の建白書も上申している。⁽²⁴⁾ さらに、早稲田大学創業者の大隈重信も、長崎でウィリアムズに教えを受けたことを述懐している。⁽²⁵⁾

一八六三年春、攘夷派浪人が大挙して横浜の外国人を襲撃するという風説が広まった。これを受けて、横浜には大量のイギリス軍艦が集結し、一触即発の事態が生じた。このとき、もし外国軍隊が横浜の保土が谷を襲撃すれば、その報復として長崎の外国人がただちに虐殺されるといわれ、長崎の外国人は拳銃を携帯し武装して警戒していた。⁽¹⁰⁾ けれども、ウィリアムズは非武装のまま、他の外国居留民の世話に従事した。のちにウィリアムズは大阪で諜報活動に従事していた諜者伊沢道一に対して、たとえ日本で殺されてもかまわないとの殉教覚悟の精神を披露するが、それがまさに長崎では現実になりかねない状態にあった。

母国のアメリカでは、南北戦争後外国委員会が財政難に陥つたため、日本を管轄する中国ミッシンへの送金不履行が続き、日本ミッシンは開設二年後から早くも閉鎖の危機を迎えていた。⁽¹⁰⁾ ウィリアムズは、極貧の暮らしを強いられるなか、東山手居留地に建立された英国教会礼拝堂のチャプレンとして生計を維持しながら、来たるべきキリスト教解禁の日を待望した。

ところで、遣日宣教師のウィリアムズとリギンズにとつて、いまだ禁教令下にある日本で宣教活動を行なうことは不可能であった。幕府の役人、長崎居留の米英貿易商、駐日オランダ公使、長崎在住アメリカ領事からは、宣教師としての身分での活動は不賢明という認識を伝えられ、アメリカの母教会からは宣教成果を期待されるといふ状況にあった。そうしたなかで、学術書の販売、神奈川へのミッシン拠点の移転、日本専任伝道主教待望論、財政処理などの諸問題において、ウィリアムズは高い能力を示した。初代中国伝道主教ブーンは、ウィリアムズの資質と英知、優れた判断力を看破しており、来日から半年後の一八六〇年一～二月には、すでにウィリアムズを日本の主教とするよう本国の母教会に推薦していた。⁽¹⁰⁾ けれども、このときは外国委員会の財政難と禁教令下の日本伝道の不透明さから、ウィリアムズの主教着任は実現しなかった。このウィリアムズに対する評価は、ブーンの他界後、一八六五年一〇月にアメリカ聖公会総会がウィリアムズを第二代中国・日本伝道主教として選出する布石となった。⁽¹⁰⁾

二 禁教令撤廃運動

長崎時代のウィリアムズは、清国における果敢な開拓伝道とは異なる慎重な行動を心がけたが、その裏では積極果敢な外交運動を展開した。禁教令撤廃運動である⁽¹⁶⁾。

一八七二年の第一回在日宣教師会議は、幕府から禁教令政策を継受した明治新政府に対しても、過度に刺激しないほうが得策であると結論づけており、プロテスタント宣教師らのこの問題への取り組みは消極的であった。一方、ローマ・カトリック教会では、幕末にB・T・プチジャン (Bernard Thadée Petitjean) 司教がパリ外国宣教会やフランス政府に禁教令の撤廃に向けて働きかけていた。また、ウィリアムズも、一八六五年三月の長崎大浦天主堂での潜伏キリシタンの「信徒発見」の二か月前から、すでにアメリカ聖公会に禁教令撤廃のための政治努力をうながしていた⁽¹⁷⁾。そして、一八六六年に帰米し主教按手を受けた後、アメリカ大統領アンドリュー・ジョンソン (Andrew Johnson) や国務長官ウィリアム・スワード (William Henry Seward) と面会し、禁教令撤廃のための外交圧力を直接要請した⁽¹⁸⁾。さらに、一八七三年の高札撤去まで、母教会に対しても、歴代駐日米英公使たちにも、懸命に撤廃運動をうながし続けた。

日本ミツシヨンの断念さえ暗示させるようなウィリアムズの懸命な訴えによって、母教会が本格的に始動したのは、一八七二年一月に岩倉使節団がアメリカに到着したまさにそのときであった。同年二月、アメリカ聖公会伝道局の代行として外国委員会主事がアメリカ大統領宛覚書を携え、ワシントンで聖公会員でもある国務長官ハミルトン・フィッシュ (Hamilton Fish) と禁教令撤廃の問題について会談するなど、アメリカ国内では日本に対する禁教令撤廃運動が高揚していた。

大統領U・S・グラント (Ulysses Simpson Grant) は、岩倉使節団との最初の交渉で早々に信教の自由に関する問題に触れた⁽¹⁹⁾。とくに、国務長官フィッシュは、この問題が「人生ノ権利、自由ノ公権」であると説き、外国の宗教を侮辱することは外国人を侮辱することであり、自由な交際ができないと強硬な姿勢を崩さなかった⁽²⁰⁾。岩

倉使節団は、条約改正に関する交渉自体が危ぶまれたため、留守政府にキリスト教禁制の高札撤去を建言することになった。さらに、訪米後のヨーロッパ歴訪諸国でも、岩倉使節団は禁教令撤廃を迫られ、ヨーロッパ民衆からもキリシタン弾圧に関して抗議と非難を浴びた。その結果、使節団から高札撤去をうながされた留守政府は、一八七三年二月二六日に駐日各外国公使に高札撤去の実施を通達した。

こうしたウィリアムズの中国と日本での条約違反と遵守、日本での条約遵守と日本への外交圧力という経緯からは、彼の動と静、静と動の使い分けを看取することができる。

三 聖公会最初の受洗者―莊村助右衛門

幕末禁制時代の一八六六年二月、ウィリアムズは長崎において熊本肥後藩士の莊村助右衛門（のちに省三と改名、諱は彝臣）に授洗した。⁽¹⁷⁾ プロテスタントでは、一八六五年一月に神奈川で針灸医の矢野隆山（元隆）がアメリカ・オランダ改革教会宣教師 J・H・バラ（James Hamilton Ballagh）から受洗した事例に次ぐ二番目の洗礼であった。一八六六年五月にはフルベッキが長崎で佐賀藩親類の村田政矩（若狭）と、その弟で同藩士の綾部幸熙（三左衛門）⁽¹⁸⁾ に洗礼を授けるが、これが三番目の事例である。

莊村助右衛門は、一八二一年に生まれ、一九〇三年に死去した。省三と称したのは明治以後の戸籍上のことである。⁽¹⁹⁾ 莊村家は家禄一〇〇石で、助右衛門は一八三六年に父一郎助の嫡子として藩主に御目見えし、一八六八年に四八歳で家督を相続した。藩校の時習館に通ったのち、江戸に遊学して儒学を学び、⁽²⁰⁾ ジョセフ・ヒコが発刊していた『海外新聞』を購読するなど、⁽²¹⁾ 才気煥発な進歩主義者の一面がうかがえる。基礎的な学問修養後は砲術の習得を志し、一八五五年には長崎で海軍伝習を受けた。砲術の研究目的で藩から江戸に派遣されると、浦賀駐屯や在府の藩士らへの指南役・世話役を務めた。江戸滞在中は幕末の蘭学者の川本幸民に入門し、帰藩後の一八六一年と一八六三年に砲術の習得や大砲・火薬製造の研究のため、長崎へ出張している。⁽²²⁾

一八六四年一月のウィリアムズ書簡によると、ウィリアムズは一八六三年八月に日本人の知人から莊村を紹介された。このとき、莊村はウィリアムズから宗教書を受け取り、一、二日後にフルベッキからもらった聖書を持参してウィリアムズに教えを請うている。以後、二週間ほど毎晩来訪して漢訳聖書とともに読み、ウィリアムズ所持の書籍と小冊子の写し、漢訳祈祷書、和文の主禱文、信条、十戒を持って郷里の熊本に帰っていった。その際、聖書と祈りの勉強に取り組むことをウィリアムズに約束した。しかし、熊本へ戻った莊村は、八〇〇〇人を従える指揮官に昇進したので、長崎に行くことができなくなったが、もし軍事書の写しを得てくれれば長崎を来訪する許可が得られるとウィリアムズに伝えてきた。そこで、ウィリアムズは莊村のために一冊の書籍を借りたことを莊村に知らせた。⁽¹⁸⁾

肥後藩部隊の砲術士官になった莊村は、一八六四年七月と一八六五年五月に長崎でウィリアムズと会い、長州藩の下関事件への四か国連合艦隊の報復戦争や、幕府による第一次長州征討戦争に関する情報を熊本に報告している。⁽¹⁹⁾そして、翌一八六六年にウィリアムズから受洗したのである。フルベッキは、ウィリアムズが莊村に授洗したことを、その教名がコーネリウスであることに言及し、一八六八（明治元）年二月二日のアメリカ聖公会伝道協会外国委員会でも、ウィリアムズが二、三年前に施洗した「日本人コーネリウス」と指摘されていることから、莊村助右衛門のクリスチャン・ネームがコーネリウスであったことがわかる。⁽²⁰⁾熊本藩指導層に属していた立場もあつたであろうが、自藩の軍事力増強と欧米文明を支えるキリスト教信仰が、莊村の受洗決意の過程で微妙に交錯していた感もある。

莊村は、留学目的の渡米を望み、その斡旋をウィリアムズはアメリカ聖公会伝道協会外国委員会に要請していた。⁽²¹⁾藩子弟の教育監督の立場にあつた莊村は、肥後藩実学党の指導者である横井小楠ら開明論者と思想を共にしており、藩子弟の留学斡旋にとどまらず、自身の留学についても積極的だったのである。莊村は幕末の活動家として、坂本竜馬から木戸孝允を紹介されて長肥両藩の和解連合を企てるなど倒幕運動にも関与していたが、⁽²²⁾肥後

藩は佐幕派保守勢力が主流であり、彼の藩内での立場は微妙であった。

明治期に「省三」と改名した荘村は、一八七一年に太政官少史として出仕し、太政大臣三条実美付属の偵員となった。それまで弾正台が持っていた行政監察機能を継承するため、一八七一年に設置されたのが監部課であり、密偵は監部課員直属の「諜者」と、大臣・参議のもとで動く「偵員」に区別されていた。荘村は、一八七五年に諜者となったが、同年に監部課は内史分局と改称され、翌年には廃止された。それでも大隈重信との関係が深かった荘村は、一八八一年の政変で大隈が失脚するまで、不平士族の動向に関する密偵として情報提供活動を続けた。引退後は、一九〇三年に他界するまで郷里で余生を送った。こうした荘村の維新後の密偵活動は、彼の幕末期長崎遊学中の情報収集活動の延長線上に位置づけられることができる。

英国教会初代香港ヴィクトリア教区主教ジョージ・スミス (George Smith) は、一八七二 (明治五) 年以前と推測されるイギリスのプレストンでの講演で、次のような話を披露している。それは、コーネリウス (荘村) がウィリアムズと連絡不通となつてからかなりのち、小包みをウィリアムズに送つたこと、その小包には、机上の漢訳聖書を前にして、荘村が彼を囲む六、八人の日本人男性に聖書を読んでいる写真が同封されていたこと、そして、彼がキリスト教信仰を告白しただけでなく、その知識を拡張しようと健闘していることをウィリアムズに伝えたかったという内容であった。

荘村の長孫の荘村鹿吉は、少年時代にウィルソンリーダーを祖父から教えられたこと、祖父が聖書、キリスト教証拠論の『天道遡原』、その他の漢訳の教書類や欧米の手記数冊を所持していたことを記憶している。これらの書籍類は、ウィリアムズから贈られたものである。また、荘村の妻「安」の話によると、鹿吉の弟が年少熊本英学校に入学を希望した際、安がキリスト教の校風を理由に入学に反対したところ、荘村は激高して「老婆」安を離縁すると家庭争議を起こしたこともあったという。家族には幕末のキリスト教禁制下に受洗した事実を語るなかつた荘村も、受洗者としての自覚は明治新政府の要職に就いたのちも強く保持していたものと思われる。た

だ、莊村は禁教令が撤廃されてからも教会生活を送っておらず、幕末の長崎で砲術研究と情報収集に専心する過程で、西欧文明の精神的基盤であるキリスト教に自身の進歩主義的な思想的立場から接近した結果の受洗とみてよいであろう。

四 海外伝道主教―中国と日本の主教ウィリアムズ

一八六八年にアメリカ聖公会第二代中国・日本伝道主教として中国に帰任したウィリアムズは、自ら新伝道地開拓旅行を敢行した結果、複数の候補地から主教在任地を武昌（のちに漢口）に定め、中国内陸部に新ミッション拠点を創設した¹⁰⁸。しかし、ウィリアムズが主教として武昌に在任すると、アメリカ聖公会の在日宣教師が不在となるため、ウィリアムズは日本ミッションの生命線として挺身すべく、一八六九年に大阪に単身移住し、プロテスタント宣教師として最初に大阪に入った¹⁰⁹。ウィリアムズは、長崎時代の一八六〇年にはすでに次の伝道候補地として、日本第二の大都市大阪に注目していたのである¹¹⁰。

こうして、ウィリアムズは一八七四年まで、中国と日本の広大な地域を管轄しなければならなくなった。上海、武昌、北京、大阪、東京を巡回し、二か国語の会話・翻訳ばかりでなく、一八七〇年には大阪から上海への渡航船の転覆事故を経験するなど、知力と体力の維持が要求された。

一方、アメリカ聖公会では、南北戦争後の一八六〇年代まで、内外伝道協会外国委員会の主事と財務委員の実務機関トップによるアフリカ伝道の偏重財政が続いていた。そのため、東洋ミッションは冷遇期にあり、一八六五年には伝道主教管轄地として存続の危機に陥った。そして、一八六八年から一八七〇年まで、中国・日本ミッションへの送金の遅滞や債務の放置などにより、ウィリアムズは伝道地で債務者とみなされ、私財投与や事業の部分停止、宣教師の本国送還などを余儀なくされた。受忍限度を超えたウィリアムズが本国へ救済処置を求めて書簡を発信したのと、本国での外国委員会主事の交代が偶然重なったことで、一八七〇年代に入ると中国・日本

ミッションの財政は好転し、アメリカ聖公会の主要伝道地となつていった。⁽²⁰⁾一八九〇年代以降は日本ミッションが最多の資金を得るまでになり、ウィリアムズが現任主教を退任したときには、中国と日本はアメリカ聖公会最大の海外看板伝道地となつていた。⁽²¹⁾

五 大阪・東京伝道時代

一八七四年に東京へ移転するまで、ウィリアムズは日本人との頻繁な接触や交流を求め、大阪で居留地外での居住を模索した。その結果、大阪川口居留地の境界外側の内外人雑居地である与力町と古川町の二か所を初期大阪伝道の拠点とし、自給宣教師 A・R・モリス (Arthur Rutherford Morris)、女性教育宣教師 E・G・エディー (Ellen G. Eddy)、宣教師ヘンリー・ランニング (Henry Lanning) を中心に、伝道、教育、医療事業を展開した。しかし、大阪伝道は横浜や神戸でキリスト教伝道が黙認される情勢とは対照的に不毛であった。キリスト教伝道の動向を探っていた伊沢道一は、「和漢ノ語ニ強シ。其智力。根機力。拔群ノ教師也。且温潤大度。生徒ヲ撫養スル懇々切々」とウィリアムズの能力を絶賛しているが、大阪伝道の不振ぶりは伊沢がいぶかるほどであったといふ。⁽²²⁾

一八七二年開校の男子校 (英和学舎の前身) が閉校を余儀なくされたのも (翌年再興)⁽²³⁾、一八七二年に申請願書を当局に提出したものの、一八七五年まで女学校の開設 (照暗女学校。平安女学校の前身) が遅延したのも、大阪府当局が狡猾に妨害したからである。大阪府知事が不在の当時、権知事として府政の実権を握っていたのが、長崎で浦上キリシタンの第一回弾圧から検挙と配流の実務を指揮していた元大浦藩士渡辺昇であった。⁽²⁴⁾さらに、雑居地の伝道拠点の借家が過去に自殺者を出していたという不吉な噂が近隣に広まり、日本人に敬遠されるといふ不運も重なっていた。⁽²⁵⁾

一八七九年になると、大阪市内伝道の拠点は川口居留地内へ移転された。そして、一八八三年にはアメリカ特

命全権公使ジョン・A・ビンガム (John Armon Bingham) を通して居留地の拡大を要求し、これを国内の外交問題に発展させて実現した(一八八六年に一〇区画増設)。その後、ウィリアムズが現任主教を辞任する一八八九年までに川口居留地の七区画には、文明開化の香り漂う洋風建築の外観を誇示するアメリカ聖公会大阪ミッションの聖テモテ教会と英和学舎(一八八七年に立教に合併)、照暗女学校、聖バルナバ病院、宣教師館などが建てられた。⁽²⁶⁾

大阪の伝道事業は、後続の T・S・ティンゲ (Theodosius Stevens Tyng) やジョン・マキム (John McKim) らによって、紀州、大和へと教線を延ばし、さらに越前、京滋、伊賀へと関西伝道網は拡大されていった。⁽²⁷⁾

一八七四年に日本専任の伝道主教となったウィリアムズの東京在住時代(一八七四〜八九年)における主な活動を列挙すると、以下のとおりである。

- ・ 日曜・平日の教か所での礼拝司式と説教など毎日の聖職活動。
- ・ 立教学校と東京の三一神学校での講義など毎日の教職活動。
- ・ ウィリアムズによって詩篇以外のほとんどが完成していたアメリカ聖公会版祈祷書の日本語訳を、在日英国教会系ミッションの英国教会伝道協会 (Church Missionary Society : 以下、CMS) および英国教会海外宣教協会 (Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts : 以下、SPG) との同一日本語祈祷書として実現させるための折衝。
- ・ フルベッキと共同で『旧約聖書』の詩篇(ウィリアムズは後半を担当)をヘブル語から訳出。
- ・ 伝道・教育・医療の各事業の監督業務。
- ・ 宣教師間のトラブルの仲裁。
- ・ アメリカ聖公会日本ミッション(東京・大阪)の財務管理。
- ・ 母教会との日本ミッション予算交渉。

- ・ 堅信礼など主教任務のための国内訪問。
- ・ 清日兼任主教からの解放後も後任の中国伝道主教不在のため課せられた巡回訪清。
- ・ 在日英米主教管轄権問題の米英教会間との折衝。
- ・ 日本聖公会法憲法規の作成。

こうした聖俗にわたる監督業務に費やすウィリアムズの過労は限界に達していた。母教会は、一八八〇年代にウィリアムズの健康状態を憂慮し、一年間の帰米休養を三年ごと（アメリカ聖公会総会開催年）にうながしたが、一八六六年から一八八九年までの現任主教時代、ウィリアムズは一度の帰国休養どころか国内休暇さえとらなかつた。宣教師としての五二年間（三年間は在清）のうち、帰米したのは主教接手時の一八六六～六七年、現任主教退任後の一八九三～九四年、一九〇三～〇四年の三回のみである。

とくに、ウィリアムズの東京在任時代は、母教会からの経済的・人的支援が恒常的に不足していたため、ウィリアムズが帰国すると日本語を話す在日宣教師が減少し、日本ミッションの勢力が落ちるといのが帰米招請謝絶の理由であつた。休暇をとらないウィリアムズは、一八八〇年代に病弱に陥っていたが、いっときだけ体重が増えたことがある。それは、念願の日本人教会である日本聖公会が創立された一八八七年二月から半年後のことであつた。ウィリアムズの現任主教退任から逆算すると二年前の時期にあたる。⁽²⁸⁾

第八節 日本聖公会創設への道程

一 日本聖公会の開祖ウィリアムズ

一八八七年に日本聖公会を設立できたのは、在日聖公会系米英ミッションの懸案であつた日本語祈禱書統一訳の実現、米英主教管轄権問題の決着、日本聖公会法憲法規の作成という三つの難題を、一〇余年に及ぶウィリア

ムズの尽力で解決したからである。⁽¹⁸⁾ところが、こうしたウィリアムズの貢献は、近年まで日本聖公会内外で過小評価されてきた。それは、日本聖公会を後援した外国三ミッションのうち二つがイギリス系であり、イギリス系が宣教師の数と事業の規模でアメリカ系を上回っていたため、一八八六年来日のイギリス人第二代日本主教エドワード・ピカステス (Edward Bickersteth) を高く評価することになったのではないかと思われる。また、一九世紀世界最強の大英帝国と同盟関係を結ぶ明治政府が、英国教会系在日ミッションの教育事業などを厚遇したことも影響していたように思われる。⁽¹⁹⁾

二 日本語祈禱書統一訳

同一日本語祈禱書の問題が取り組まれたのは、東京にSPGとCMSの英国教会系宣教師がそろった直後の一八七五年である。ウィリアムズの本国への報告によれば、このとき祈禱書の日本語訳は大部分が完了していた。ウィリアムズは、在日イギリス人宣教師たちが来日一六年を数える彼の日本語訳を基礎にした祈禱書の共同使用に合意することに希望を持ち、アメリカ聖公会版祈禱書の日本語訳の単独行を遅らせていたのである。⁽²⁰⁾

ところが、聖別禱の部分で米英版祈禱書では異なることから、米英間の交渉は決裂した。ウィリアムズは将来、米英聖公会の合同で一つになる日本人教会 (日本聖公会) に米英系二種類の日本語訳祈禱書がもたされることを憂慮し、アメリカ聖公会伝道機関や在日アメリカ人宣教師らがアメリカ版祈禱書の単独行を主張するなか、イギリス人宣教師らと折衝を重ね続けた。⁽²¹⁾そして、ウィリアムズが英国教会版祈禱書の聖別禱を受け入れるという勇氣ある譲歩に踏み切ったことで、一八七八年、祈禱書の公禱部分だけではあるが、米英宣教師の協力による日本人信徒のための『朝晩禱文付リタニー』が実現した。

これは、ウィリアムズが現地責任者の裁量として、本国の認可を待たずに動いた最初で最後の事例であった。日本聖公会の同一日本語祈禱書は、彼の英断なしに生まれなかったのである。⁽²⁴⁾

三 英米聖公会在日主教管轄権問題の解決

一八七九年春、英国教会系伝道機関 S P G の主事ヘンリー・W・タッカー (Henry W. Tucker) は、ウィリアムズに在日イギリス人主教派遣の是非を打診し、日本における英米主教管轄権問題の折衝が始まった。

東京と大阪にアメリカとイギリスの聖公会系宣教師が混在していた当時、東京をアメリカ聖公会が、大阪を英国教会が管轄するという当初提起された厳格な排他的地域分割案では、問題が解決しないことをウィリアムズは早々に看破し、早くから本国のアメリカ聖公会外国委員会に報告していた。⁽²⁶⁾しかし、外国委員会は、アメリカ聖公会帰属宣教師が大阪へは英国教会より先に入り、東京へは英国教会と同時に入ったという経緯に執着していて、問題解決の難しさを理解するのはそれから約三年後のことであった。

英国教会側も、同系伝道機関である S P G と C M S の間で、遣日イギリス人主教の帰属問題 (S P G か C M S か) と主教俸給供与問題 (単独負担か折半か) で、いずれも合意をみないまま、アメリカ聖公会側と交渉を開始していた。ウィリアムズが当初から予測していたように、在日 S P G 宣教師と在日 C M S 宣教師はともに日本の主教管轄権問題における排他的地域分割案を批判していたが、英国の伝道母教会はそれを傾聴できないという状況が続いていた。⁽²⁶⁾滞っていた問題が解決に向けて再び動き出したのは、アメリカ聖公会、S P G、C M S の米英三ミッション代表の主事が会合を開いた一八八二年春からである。

ウィリアムズは、在日米英主教管轄権問題の解決案を求めてきた母教会のアメリカ聖公会に対して、同年六月の書簡において、主教在住地を重複させない、主教管轄権を排他的に地域分割しない、米英ミッションの共通地 (大阪、京都) を設定する、という三項目を提示した。⁽²⁷⁾英国教会側の S P G と C M S も、このウィリアムズ私案を原則として受け入れたことにより、⁽²⁸⁾アメリカ人主教は東京に、イギリス人主教は神戸に在住することになり (いずれも管轄権はともなわない)、日本の英米主教管轄権問題は決着した。さらに、米英の母教会もこれを批准し、初代イギリス人主教アーサー・ウィリアム・プール (Arthur William Poole) が一八八三年一月一三日に横浜

に到着、その後神戸に着任した。⁽²⁴⁾

ウィリアムズが発案した主教管轄権の原則は、当時の海外聖公会全体の基本原則ともなった。⁽²⁵⁾ しかしながら日本聖公会が創立された一八八七年、第二代イギリス人主教エドワード・ピカステスが協定違反をおかして東京に移住したことは、その後長く米英聖公会間の教会争議の火種として残った。⁽²⁶⁾

四 日本聖公会法憲法規の作成

一八八六年一月二七日、アメリカ聖公会主教常設外国伝道委員会議長 G・T・ベデル (Gregory Thurston Bedit) は、アメリカ聖公会総裁主教がウィリアムズに海外伝道管轄権に関する法規を作成するよう要請したと伝えた。ウィリアムズはかねて、国内伝道に関しては総裁主教に管轄権があるが、海外伝道に関しては総裁主教になんの権限も存在しないというアメリカ聖公会の教会法的欠損を指摘しており、その問題に対する私案が評価されての要請であった。

ウィリアムズは、これをさらに米英聖公会の日本人合同教会 (日本聖公会) の法憲法規へと発展させ、日本聖公会の法憲法規草案を作成した。この草案は、アメリカ聖公会の法規から最小限必要な内容だけを抜粋したもので、⁽²⁷⁾ 西欧の教會的伝統のなかで英米の聖公会に必要とされていた英国教会三九箇条については、新しい日本人の教会には不要とされ、それを削除して提示された。一八八六年七月開催の在日米英三ミッシヨンの代表者会議も、三九箇条の削除を容認していた。⁽²⁸⁾

ところが、日本聖公会創立総会の直前、法憲草案は三九箇条 (「聖公会大綱」) を挿入したものに修正され、総会に提出された。これが日本人代議員の反発を招き、創立総会を最終日まで紛糾させる大問題となった。結局、三九箇条は仮採用とされ、法憲法規への挿入は延期するとの宣言文を法憲と法規の間に置くことで決着した。⁽²⁹⁾

法憲への三九箇条挿入を主張した人物は、イギリス人主教ピカステスであった。⁽³⁰⁾ 実は日本聖公会創立総会の開

催直前に、イギリス本国からカンタベリー大主教とCMS主事らが、そして一部の在日CMS系イギリス人宣教師が、三九箇条を削除した法憲草案に反対してきたのである。イギリス本国の要請を無視すれば、日本聖公会の創立総会開催も危ぶまれたため、ピカステスは法憲法規草案の詳しい内容を事前に報告して認可を得ることはせず、事後承認を得る方針で臨んだのである。これについて、ピカステスは日本聖公会創立総会直後の一八八七年三月一日付の本国宛書簡で、自らは三九箇条省略の法憲法規を提案もせず、考えもしなかったと釈明⁽²⁶⁾、在日CMS宣教師ヘンリー・エヴィントン（Henry Evington）も同日付の書簡で、ピカステスがそう語ったと証言している⁽²⁶⁾。

ピカステスとは対照的に、ウィリアムズは三九箇条を削除した法憲法規草案と、日本聖公会創立総会の開催に対するアメリカの最高教会権威（一八八六年秋開催のアメリカ聖公会シカゴ総会）からの承認を辛抱強く待ち続け、母教会の認可を得てから行動を起こした。そのアメリカ聖公会シカゴ総会では、教会一致のセツションで次の四綱領を採択した。すなわち、旧・新約聖書（聖典）、使徒信経・ニケア信経（信条）、洗礼・聖餐（二つのサクラメント）、主教・司祭・執事（三聖職位）である。これが、一八八八年のランベス会議（一〇年ごとに開催される全聖公会主教会議）で追認採択され、のちに三九箇条に替わる全聖公会の教理的指標となった、いわゆる「シカゴ＝ランベス四綱領」である。

そして、ウィリアムズが創案した日本聖公会法憲の最初の二条は、この四綱領と同じ内容であった。しかも、ウィリアムズの草案作成時期はシカゴ総会開催前であり、事前にシカゴ総会の四綱領をまったく知らなかったのである。ウィリアムズは、日本聖公会創立総会直後の一八八七年三月の書簡で、シカゴ四綱領の内容に関して本国に質問している⁽²⁶⁾。おそらく彼は、四綱領の基礎となった一八七〇年刊行の神学者ウィリアム・R・ハンティントン（William Reed Huntington）の『教会の理念』を先取りしていたと思われる。こうしたウィリアムズの英知により、日本聖公会は全世界のランベス会議に先駆けて、一八八七年に四綱領を法憲の基本理念に据えたので

あった。⁽²⁰⁾

五 現任主教退任後のウィリアムズ―晩年の京都寒冷地開拓伝道

一八八九年に日本伝道主教を辞任したとき、来日三〇年のウィリアムズの年齢は六〇歳に達していた。一八七九年に五〇歳で遺言書を作成し⁽²¹⁾、一八八三年には主教辞任の意思を固めていたが、本国の強い遺留によりこのときは留任していた。⁽²²⁾

ウィリアムズは、一八八九年の辞任後⁽²³⁾も、後任主教（四年間で四人の被選主教が辞退）が着任する一八九三年まで、東京の複数の教会や講義所を管理しなければならなかった。たとえば、一八九三年度には計一か所を管理していた。すぐに日本を離れることができなかったウィリアムズは、家族のなかでただ一人残されていた病身の弟の最期にも間に合わなかった。⁽²⁴⁾

一八九三年の帰米療養後、一八九四年一二月に再来日したウィリアムズは最後の十数年を、後任の第二代日本（東京）伝道主教ジョン・マキム（John McKim）の依頼で、アメリカ人主教不在の関西圏での教会管理と遠距離訪問伝道、新拠点開設に一宣教師として献身した。一八九六年以降は、京都市内五条講義所（京都聖ヨハネ教会の前身）、大津淡海講義所（大津基督教会の前身）、小浜恵講義所（小浜聖ルカ教会の前身）、堺聖テモテ教会を管理しながら、京都四条、宮津、福井、伏見、加悦、舞鶴に講義所を新設するなど、ウィリアムズは東奔西走の日々が続いたのである。

七〇歳をこえた一八九九年秋、鉄道も開通していない寒冷地の宮津や舞鶴への巡回途上、ウィリアムズは人力車から落ちて一時失神する重傷を負ったが、額から血を流しながら自力で予定地にたどり着くというエピソードを残している。こうした彼の壮絶な開拓伝道意欲はその後も衰えることなく、一九〇一年度には新たに大阪和泉の岸和田、兵庫但馬の余部を加え、管理教会は八か所に増加した。東京から関西に巡回訪問したマキムは、老齡

のウィリアムズが通常の宣教師二人分の仕事をしていると、ウィリアムズの働きぶりを称えるところにも、彼の健康を憂慮したといわれている⁽²⁸⁾。

ウィリアムズは、前回の帰米から一〇年後の一九〇三年一〇月、帰米の途についていたが、航海中に病氣となり、ホノルルで二週間の療養を余儀なくされた。その後、カリフォルニアに到着し、ヴァージニアのリッチモンドには翌一九〇四年初夏に帰郷したようである。そして、同年一〇月に日本に帰任すると、京都聖ヨハネ教会の土地・建築資金の私財投与不足額の集積に尽力し、一九〇七年に会堂（現在、重要文化財として愛知県犬山市の明治村に移築保存）を完成させた。

しかし、ウィリアムズにもう余力は残されていなかった⁽²⁹⁾。半世紀に及ぶ東洋伝道の使命の終焉が近づいたことを悟ったウィリアムズは、老齢の自分の代わりに若い宣教師が新たに日本に派遣されることを望みつつ、余命は母国から祈祷をもって尽くすとの言葉を残し、一九〇八年にヴァージニア州リッチモンドへ静かに帰郷した。最後は視力も筆力も知力も体力も残らないほど、彼はすべてを日本に捧げ尽くしていた。

帰米後、ウィリアムズは故郷の養老院に入り、人の判別もつかないほど衰弱するなかで、日本語で祈祷する日々を送った。そして、一九一〇年二月二日、この世を去った。八一歳であった⁽³⁰⁾。ニコライ（Nikolai）とヘボンが他界する二年前である。初代遣日宣教師らの就眠は明治の終焉でもあった。